

令和元年度 港区芝地区総合支所 委託調査

芝地区子どもアートスクール等事業実施に係る調査報告書
— (仮称) 芝アートスクール事業の提案 —

令和元年 8 月 9 日

慶應義塾大学アート・センター



慶應義塾大学
アート・センター
KEIO UNIVERSITY ART CENTER

本報告書は、港区芝地区総合支所管理課による委託業務として、慶應義塾大学アート・センターが実施した「芝地区子どもアートスクール等事業実施に係る調査」の成果をとりまとめたものです。

本報告書の著作権および著作権は港区に帰属しており、本報告書の全部又は一部の無断複製等の行為は、法律で認められたときを除き著作権の侵害にあたります。これらの利用行為を行うときは港区の承認手続きが必要です。

本報告書の概要

本書は、芝地区総合支所地域事業「芝 de Meet The Art～アートに親しむまち、芝～」を踏まえ、芝地区子どもアートスクール等事業実施に向けて、（仮称）「芝アートスクール」構想案をまとめるにあたっての調査報告書である。本書は大きく以下の3つ（A編、B編、C編）の内容から構成される。それぞれの内容は下記のとおりである。

A編 本事業構想の背景／有識者へのヒアリング／先進事例調査

本事業構想案をまとめるに当たり、はじめに本事業構想の背景について、「港区基本計画芝地区版計画書」及び「芝地区の特性を活かしたアートによるまちづくり」ワークショップでの提言を整理した。続いて、公教育、地域におけるアートプロジェクトの実践、共生社会に関する研究、それぞれの領域より有識者へのヒアリングを行い、本事業構想の参考にした。さらに本事業構想が参考にすべき先進事例についても調査し記載した。

B編 （仮称）「芝アートスクール」の理念と目的／事業基礎情報／カリキュラム編成／事業運営体制

A編での調査及びヒアリングをもとに、（仮称）「芝アートスクール」の理念と目的を提案した。続いて、事業基礎情報、カリキュラム編成など、具体的な要件を調査の上、合わせて記載した。

C編 事業実施設計（案）／事業計画書案

本事業の実実施設計及び事業計画案について、それぞれパイロット事業、プロトタイプ事業をまとめて提案した。

目次

A編

1. 本事業構想の背景	7
1-1. 芝地区の将来像と本事業の位置付け	7
1-2. これまでの「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」とその課題	7
1-3. 「芝地区の特性を活かしたアートによるまちづくり」ワークショップ	9
2. 有識者へのヒアリング結果	12
2-1. 江原貴美子氏（港区立筭小学校 図工科 教諭）	12
2-2. 住友文彦氏（アーツ前橋館長）	16
2-3. 永田佳之氏（聖心女子大学現代教養学部 教育学科教授）	22
2-4. 三者のヒアリングのまとめ	25
3. 先進事例	26
3-1. 横浜市	26
3-2. 名古屋市	29
3-3. NPO法人CANVAS	32
3-4. レッジョ・エミリア幼児教育	35

B編

4. （仮称）芝アートスクールの理念と目的（案）	39
5. 事業基礎情報	43
5-1. 事業実施の対象者像	43
5-2. 事業実施場所	45
5-3. 事業実施時期	46
6. カリキュラム編成	48
6-1. 講座形式	48
6-2. 対象領域	49
6-3. 留意点	49
7. 事業運営体制	51

C編

8. 事業実施設計（案）	-----	53
8-1. 令和元年度	パイロット事業	----- 53
8-2. 令和2年度	プロトタイプ事業	----- 54
8-3. 令和3年度	本事業	----- 56
9. 主要参考文献	-----	58

1. 本事業構想の背景

1-1. 芝地区の将来像と本事業の位置付け（「港区基本計画 芝地区版計画書」より）

港区芝地区では、【互いに支えあう ぬくもりと安心に包まれたまち「芝」】を将来像としてかかげて、「Ⅰかがやくまち」、「Ⅱにぎわうまち」、「Ⅲはぐくむまち」の三つの柱を軸に、政策を計画・施策している。中でも、「Ⅱにぎわうまち」では、【人との出会いで、幸せが生まれるまち「芝」】をスローガンに、地域をつなぐ多様な主体の支援、地域をつなぐ機会と場の充実、地域の魅力の発掘・発信に取り組んでいる。その具体的な取り組みの一つとして、「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」を展開し、アートによるコミュニティづくり、芝地区らしいまちづくりを目指している。区民の表現の場やアートの展示ができる場の整備、貴重な歴史・文化の発掘・発信などを区民、事業者とともに進め、豊かな地域資源を活用し、芝地区の魅力をさらに高める活動を推進している。

港区芝地区の課題

芝地区では、近年の高層マンションの増加等により、新たに地域に暮らし始める人が増えている。昼間人口と夜間人口の接点が希薄であり、また、高層マンションに見られるように近隣に生活する人同士であっても、コミュニケーションがない、没コミュニケーションの問題がすでに指摘されている。一見地域とつながりが深いように見受けられる子育て世帯であっても、職場や保育所といった限られたコミュニティにしか関与していない実態があるなど、人と人のつながりが希薄であることが大きな課題となっている。¹

1-2. これまでの「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」とその課題

芝地区区民参画組織・芝会議「地区版計画推進部会」からの提言²

以下では、これからの「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」の在り方を構想するための参考として、平成 29 年度に実施された同事業に対する芝地区区民参画組織・芝会議「地区版計画推進部会」からの提言を転載し、その内容を整理する。

■事業の課題：アート展示という事業内容と、治安改善という事業目的の関係が不明確。アート展示が直接に治安をよくするわけではなく、事業を通じてコミュニティ形成を進めること

¹ 港区芝地区総合支所管理課担当者へのヒアリングより（2019年6月4日実施）

² 『港区基本計画 芝地区版計画書』港区芝地区総合支所協働推進課編集・発行、2018年3月発行、p. 90, 91

で、治安を向上させるという視点が足りない。コミュニティ形成に主眼を置く場合、一過性の事業ではなく、長期的に継続していく必要がある。

■提言1：アートを通じたコミュニティづくりの推進

アートを通じたコミュニティづくりという視点で事業を進めるため、展示するアートは、業者や外部のアーティストへすべてを依頼するのではなく、区民の表現の場として活用する。

具体案

- ・ワークショップの実施
- ・誰もが制作できる場
- ・障害者の表現の場
- ・区長賞の設定

■提言2：アートによる芝地区らしいまちづくりの推進

まちづくりの観点から、芝地区らしさが伝わる展示や交流を実施する。アート展示による景観の向上は、まちへの親しみにつながる。

具体案

- ・絵画に限らず、音楽や映像などアートを幅広くとらえて発表の方法や機会を増やす
- ・地域の文化・歴史をふまえた作品の展示、トンネルの中など無機質なところは、アートがあると親しみがわく。

■評価

上記のような芝地区区民参画組織からの指摘の中でも、とりわけ長期的な視点からの本事業への言及は、最も重要である。アート作品の制作といった一過性のイベントではなく、関わった人々の成長や変化を視野に入れた長期的な事業運営を行っていくことが、コミュニティの形成には必要であるという認識が、明確に示されているからである。また、区民の表現の場としての展示の実施や制作できる場づくりへの要望は、区民の創造力を発揮する場が求められていることを示している。中でも、誰もが制作できる場、障害者の表現の場、といった要望は、共生社会の実現へ向けての重要な提言となっている。

コミュニティ形成・まちづくりは、即時効果を期待して実施するものではなく、実践の積み重ねを通して、少しずつ改善されていくものである。今後の「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」を構想するにあたり、誰もが参加でき、継続的・長期的な活動を可能にする理念及び運営体制づくりが求められる。

1-3. 「芝地区の特性を活かしたアートによるまちづくり」ワークショップ³

平成 29 年度及び平成 30 年度に実施された「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」及び芝地区区民参画組織からの提言をもとに、公募による区民、アート関係者などが参加し、今後の「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」の事業案を構想するためのワークショップが区の主催により開催された。以下では、ワークショップで示された事業案をまとめ、評価を加えた上で、新たな事業構想の枠組みについて検討する。

ワークショップ実施概要

■開催時期

- ・第 1 回ワークショップ 平成 30 年 10 月 3 日 14 時～15 時
- ・第 2 回ワークショップ 平成 30 年 10 月 17 日 13 時～17 時
- ・第 3 回ワークショップ 平成 30 年 11 月 2 日 14 時～15 時 30 分

■各事業案への評価

K 班：芝地区の特性を活かしたアートによるまちづくり／芝子どもアートスクール

評価

子どもが成長し社会を担う世代となるまでの世代の変容・成長を想定しており、将来の社会を見据えた事業として長期的な実施を提案している。次世代教育を前面にかかげ、そこにアートの力による地域活性化を結びつけることで、コミュニティにおける世代間交流を活性化させ、より良いまちづくりを目指している。事業を実施するコミュニティ自体が、子どもの教育に触れることで、コミュニティとして成熟していくという将来設計が描かれている。さらに、アート・ディレクター⁴などの在勤者の地域貢献・還元についても言及しており、多様な主体が事業に関わることで、コミュニティに活力が生まれるという視点を含んでいる。

N 班：『芝色物語』～色で紡ぐまちづくり

評価

芝地区の歴史的探求と色を組み合わせた着眼点が興味深く、地域の歴史、社会、総合学習の観点から、公教育への適応性が高い案である。調査や探検の要素を取り入れることで、学びの

³ 本ワークショップで提案された各事業案については、以下の報告書を参照した。

『芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～「芝地区の特性を活かしたアートによるまちづくり」ワークショップ』報告書、2018 年 11 月 30 日発行

『平成 30 年度芝地区区長と区政を語る報告書』、2019 年 3 月発行

⁴ アート・ディレクターは、広告・web サイト・パッケージなど、ビジュアルデザインの指揮をとる責任者

定着化が期待できる。本事業においても、プログラムの一環として採用可能である。一方で、対象領域の専門性が高いため、講師や協力者の選定を含め、事業内での位置付けを明確にする必要がある。

H班：芝アートフェスティバル／芝アートビレッジ

評価

造形芸術⁵のみならず、演劇やダンスなどのパフォーマンス・アーツ⁶を含み、アート概念を広くとらえている点で汎用性の高いプランである。また、アーティスト・イン・レジデンス⁷を盛り込み、アーティストが生きていける地域社会への視点が入り込められている点もまた、共生社会の実現を考える上で重要である。さらに、港区芝地区にある歴史的・文化的な資源について詳しく紹介しており、事業の基礎情報として有益である。一方で、アート振興のためのプランという側面が強く押し出されているため、地域のコミュニティの問題をアートで解決していく視点がより必要である。

■各事業提案への総評

各班の事業案には、新事業を構想していくに当たっての重要な提案が含まれている。K班は企業や在勤者といった人的・組織的な資源、N班・H班は歴史・文化的な資源の活用を挙げており、いずれの案も芝地区ならではの豊かな資源を活用した事業案となっている。さらにアートの定義に関して、3班とも、従来の芸術ジャンル、すなわち、絵画、版画、彫刻、壁画、建築など、としてではなく、より広い視点でアートを捉えている。多様なアートの在り方を許容し、社会的課題をアートの力によって解決していくといった共通の認識が見られる。

3班とも優れた提案ではあるが、事業の構築に当たっての妥当性を鑑みると、K班による「芝こどもアートスクール」が、次世代育成を目的に事業を構築しており、且つ、在勤者や地域の人との交流の枠組みを示している点において優れた提案である。こどもアートスクールを基軸としながら、地域の歴史への深い学びをもたらすN班の提案をカリキュラムの一環として取り入れることで、双方の提案を効果的に達成することが可能となる。また、H班による港区内の既存の活動団体との連携を視野に入れた活動の広がり及び情報発信の在り方を活かすことで、更に効果的に事業目的を達成することが可能である。

3班からの提案及びより良好なコミュニティの形成という「芝 de Meet The Art ～アートに親しむまち、芝～」の本来の理念に立ち返ると、新事業を構想するための重要なポイントとして、社会におけるアートの力、世代間の交流、芝地区の特性、子どもの教育が確認される。

⁵ 絵画、版画、彫刻、建築、工芸など、有形の芸術作品を指す空間芸術⇔文学、文芸、などの時間芸術。

⁶ 上演芸術の意味。音楽、演劇、舞踊などが含まれる。

⁷ アーティストが一定期間、地域に滞在しながら制作を行うこと。

K班の「芝こどもアートスクール」構想を基軸として、N班及びH班のアイデアを事業に取り込みながら、本報告書で報告する（仮称）「芝アートスクール」事業として構築することが、本事業構想に最も相応しいと考える。

2. 有識者へのヒアリング結果

本事業について、有識者へヒアリングを実施し、事業構想の参考にした。ヒアリングに応じて頂いたのは、以下の3名である。

- ・ 江原貴美子氏 港区立筭小学校 図工科 教諭
- ・ 住友文彦氏 アーツ前橋館長／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授
- ・ 永田佳之氏 聖心女子大学現代教養学部 教育学科教授／グローバル共生研究所副所長

江原氏には図工科の教員として、港区内の小学校教育に長く携わっているご経験から、主に公教育と本事業との関係について、ヒアリングを実施した。

住友氏は地域と密着したアート活動を展開しているアーツ前橋の館長である。前橋の実践を中心に、社会とアートの関係について伺った。

永田氏は国際的な教育支援活動に関する専門家であり、グローバルな視点からの共生社会を目指す活動を行っている。

本事業では、共生社会の実現が一つの大きな目的となっており、社会的課題の解決と子どもの教育の観点から、助言を頂いた。

2-1. 江原貴美子氏（港区立筭小学校 図工科 教諭）

ヒアリング概要

日時：2019年7月9日（火）18時 - 20時

場所：慶應義塾大学アート・センター 港区三田3-2-5 2階

聞き手：橋本まゆ（慶應義塾大学アート・センター）、桐島美帆（東京藝術大学大学美術館）

同席者：渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）※19時より参加

江原貴美子氏プロフィール

港区内の小学校で長く図工科の教師をされており、港区の教育・地域事情に精通している。江原氏本人が芝地区生まれである。2018（平成30）年度は、4年生の授業内で、港区在住の工芸作家を講師として招聘する授業・岡田茂吉美術文化財団&日本工芸会「伝統工芸出張授業（陶芸）」～うつわをデザインしてみよう～を実施。その他、港区ミュージアムネットワークの加盟館の職員を対象とした、子どもの鑑賞教育に関する研究会を開催するなど、港区内の文化・芸術施設と学校教育をつなぐ活動に貢献されている。また、東町小学校に勤務されていた際には、港区とアート・センターによる在住・在勤・在学者を対象としたワークショップ（2009（平成21）年度）にもご協力頂いた。また、私人として、東京都現代美術館、目黒区美術館のボランティア活動に20年以上携わっている。

（１）芝アートスクール事業構想について

・公的な機関だけではなく、アートと人々が結びつくという視点が素晴らしい。公教育だけでは教育は成り立たない。社会の多様な主体と連携した教育が必要である。すでに、企業やNPOが公教育の授業に参入している。全校規模での実施は難しくとも、学校や授業、部活単位での実施であれば可能である。

例) 筭小学校の一年生を対象とした「アートさんぽ」、工芸会との連携など

・構想は大きく、実施は小さくとも確実にいき、丁寧に実績を積み上げていくことが大切である。小さなところから良いので、着実に丁寧に取り組む視点が必要である。

・越後妻有アートトリエンナーレ⁸の初期にボランティアとして関わった経験から、過疎化した社会がアートによって変容していく様子を実感した。妻有（新潟）で生まれるアートの力と都心（港区）のアートの力は、異なるものではある。

・過去に麻布アートフェスタに関わった経験があり、学校の子どもたちと麻布のキャラクター制作を行った。残念ながら事業は終了してしまった。区民が本事業の必要性を強く認識し、事業をなくさないでほしい、といった声が区民から上がるようになることが、理想的な在り方である。

（２）港区の特徴

・芝地区や麻布地区には、約100年間この土地に暮らしている方がいる。産業を営んでいる方もいる。また、現代アートが身近にあるのも港区ならではの環境であり、実物の力を体験することができる。鑑賞経験の豊かさを可能にするのも港区の大きな魅力である。

例) ガラス屋、石材店、商店など

例) 三保谷ガラス⁹と現代アーティストの共同制作の事例／古き良さと新しさが共存
三保谷ガラスの先代との共同授業を計画していたが、ご逝去により実現に至らなかった。

例) 森美術館の展覧会「カタストロフと美術のちから」（2018）を児童と鑑賞。出品作家の宮島達男氏による特別な解説も経験。六本木けやき坂の宮島氏の作品《Counter Void》を児童と鑑賞。

（３）芝アートスクールの機能と効果

・在勤者を取り込むには、緩やかな実施方法が必要である。

⁸ 正式名称は「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」。過疎高齢化の進む日本有数の豪雪地・越後妻有（新潟県十日町市、津南町）を舞台に、2000年から3年に1度開催されている世界最大級の国際芸術祭。同地の豊かな自然環境と現代アートの調和により、国内外から高い評価を得ている。

⁹ 西麻布にある創業明治4年（1871年）のガラス店。アーティストの作品制作に多く協力している。

- ・ イベント性、単発性は歓迎されない。継続的な実施こそが大切である。
- ・ 一つの事業を確実に実施し、広報や報告、情報の発信を確実に行う必要がある。
- ・ 事業成長のイメージ
 - －パイロット事業¹⁰実施
 - －広報
 - －人と場をつなぐ機能を充実させる
 - －報告会 次につなげていく場
 - －関心のある層、応援者の取り込み／波及 → 緩やかな運動体へ
- ・ 次世代育成

芝アートスクールを体験した子どもたちが、講師やボランティアとして、事業に再び携わるようになることで、真の意味での人材育成が果たされる。

例) 目黒区美術館 日本の美術館の教育事業の草分け的存在として、多様な事業を実施。近年、ワークショップに参加した子どもたちが成長して、ボランティアとして戻ってくるという、好循環が起きている。この事例は、本事業の目指すべき姿ではないだろうか。

先進事例) 港区ミュージアムネットワーク

関心を持っている人が立ち寄れる、アクセスできる窓口としての機能が非常に大切である。こうした窓口があることによって、関心はあるが実行に移すことができずにいる人たちが、時宜を得て、参加することが可能になる。将来に開かれた仕組みづくりが必要である。

(4) 実施の枠組み

公教育、課外授業、部活動、学童クラブ

パイロット事業を学童クラブで実施するのは、現実的で適切である。また、地区内の全校規模での実施となると容易ではないが、各学校や教員の采配で、授業内でワークショップを実施したり、学外へ作品鑑賞に出向いたりすることは可能である。

社会包摂の視点

- ・ 障害児への教育

特別支援学級を有する学校：本村小学校、港南小学校、赤羽小学校、青山小学校

例)

¹⁰ 本事業の実施に先駆けて行われる試験的事業。令和元年度中に実施。パイロット事業の後に、本事業の原型となるプロトタイプ事業を実施予定。

国立新美術館：火曜の休館日に学校向けに美術館を開放

→特別支援学級が訪れるようになった。他の来館者へ気を遣うことなく、子どもたちが美術に触れることのできる非常に貴重な機会である。

東京都現代美術館：特別支援学校・学級限定アーティストの一日学校訪問 2019 年度より

- ・不登校児へのアプローチの方法

例)

港区適応指導教室 つばさ教室：登校は困難であっても、繊細な感受性を持ち合わせている児童がいるのではないだろうか。

- ・先生がたのネットワークも有効に活用すべきである。

カリキュラム構成

- ・区の多様な施設の利用 例) 港区立郷土歴史館のさわれる展示室

・インカレ 運動部で盛んだが、文化部では、小学生の区展を年に一回開催
中学生は時間数の関係で、近年では区展の開催はない。

- ・学齢

中学校の3年間は成長・変化に富んだ素晴らしい時間である。生徒ひとりひとりの成長にアートが寄り添い、支えることができるのではないだろうか。

(5) ヒアリングの評価

公教育とは異なる学びの場としての、本事業への期待が寄せられた。公教育・学校でできることがすべてではない、学校、家庭だけではなく、色々なところに子どもたちの居場所がある社会が豊かな社会である、という観点から、子どもたちの居場所としての本事業構想への賛同が得られた。さらに、子どもたちにとって、親でも先生でもない大人との触れ合いが大切であり、地域の人々が関わることで、世代間交流や多様な人たちとのコミュニケーションが生まれることの大切さが強調された。

同時に、次世代育成の観点からもっとも重要なのは、継続性であることが繰り返し強調された。事業を実施していない時期であっても、関心のある人たちが集い、情報を得られる仕組みづくりが必要であり、ネットワークづくりを進めていくことが大切であるとのアドバイスを得た。ネットワークづくりに関しては、港区ミュージアムネットワークなどの先行する事例を参考にしていきたい。

アーティスト・イン・レジデンス、表現の森など、アーツ前橋¹¹は開館前より、地域と密接に関わる活動を展開している。とりわけ社会包摂¹²の視点から長期にわたって行われている「表現の森」は、共生社会を目指す本事業にとっても大変参考になるため、館長の住友文彦氏へのヒアリングを行った。

ヒアリング概要

日時：2019年7月20日（土） 11時-12時10分

場所：アーツ前橋 群馬県前橋市千代田町5-1-16

聞き手：橋本まゆ（慶應義塾大学アート・センター）、桐島美帆（東京藝術大学大学美術館）

住友文彦氏プロフィール

1971年、埼玉県生まれ。東大大学院総合文化研究科修了後、金沢21世紀美術館準備室や東京都現代美術館で展覧会の企画などに従事。前橋市嘱託学芸員を経て、2013年7月にアーツ前橋館長に就任。東京芸大大学院国際芸術創造研究科准教授も務める。

¹¹ 2013年に開館した群馬県前橋市による美術館。芸術文化の支援や振興を担う。「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」をコンセプトとして掲げている。地域と密接に連携した取組みへの評価は高く、2018年12月、一般社団法人地域創造より、地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞。

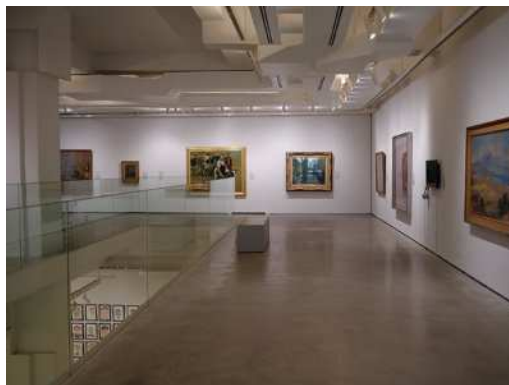
¹² 障害のある人を無理に一般の基準にあてはめるのではなく、違いのある人たちを、違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうという考え方。社会包摂の対象には、障害者だけではなく、貧困を抱える人、移民・外国人、高齢者、LGBT、病気を抱える人、災害の被災者など、様々な少数者が含まれる。参考：「文化と社会包摂」文化庁 × 九州大学共同研究チーム編『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、2019年、p.22



アーツ前橋のコンセプト



「のぞみの家」の子ども達と
アーティスト広瀬智央・後藤朋美との共同作品



展示室



アーカイヴ室

(1) アーツ前橋の実践について

社会包摂への視点

アーツ前橋は収蔵品 750 点を有する美術館である。美術館活動の一環として、地域プロジェクトを実施しており、その中の一つに社会包摂に取り組む「表現の森」がある。美術館の構想段階から、将来にわたって美術館があって良かった、と言われるためには、何が必要かを考えてきたという。そこで、美術館に来られない人はどのような人か、アートに関わるのが難しい人はどのような人か、という視点を大切に守ってきた。母子家庭の組織「のぞみの家」の事務局長が関心を持ってくれたことが、表現の森を始動させるきっかけとなった。

表現の森¹³

5つのプロジェクトが進行している。各プロジェクトが連携する団体・施設は以下の通り。

- 1 高齢者施設「えいめい」
- 2 ひきこもりの子どもたちのための「アリスの広場」

¹³ アーツ前橋が取り組む「地域アートプロジェクト」の一つ。「表現の森」特設ホームページには、5つのプロジェクトが詳細に記録されている。同ホームページでは、関連するシンポジウムや展覧会に関するテキストを読むことができる。<https://www.artismaebashi.jp/FoE/projects/project05/>

3 南橋団地¹⁴

4 母子支援施設「のぞみの家」

5 ベトナムからの難民のうち精神疾患を患った人たちを受け入れてきた施設「あかつきの村」

1 に関しては、プライバシー保護の観点からアウトプットを求めない。のぞみの家には、DV被害からのシェルター的な役割があり、身を隠すために県外から前橋へやってくる母子も少なくない。前橋になじみのない施設利用者が多いため、アーツ前橋によるプロジェクトは、地域とのつながりをつくるきっかけとなっている。

¹⁴ 1960年代より建ちはじめた前橋市内にある団地。現在では所得の少ない家庭や外国人の居住者が暮らすなど、社会の中で周縁化している。幼少期に同団地で暮した経験のあるアーティスト中島佑太が、同団地で暮す子どもを対象に継続的にワークショップを実施している。

長期的運営を支える理念の共有

議員への説明を年2回、館長が自ら行う。アートのことはよく分からない、と話す福祉関係の人たちも、アーツ前橋の取組みが大事であるという共通認識ができています。

表現の森をはじめとするアーツ前橋の事業は、一過性のものではなく、将来にわたり取り組んでいく意識が、施設側と美術館側で共有できている。

運営資金面では、市へ予算請求を毎年しており、さらに外部資金も獲得して取り組んでいる。外部資金の獲得は、市の側が取組みの重要性を認識することにも役立っている。

施設との関係

表現の森で活動をともしする5つの施設は、館の学芸員らとの人間関係に基づいて連携がスタート。今後も上記5つとの関係を軸に、長期的に活動を継続していく予定だが、アリスの広場との関係から、LGBT¹⁵の支援の団体との連携が生まれようとしている。

展望

現在プロジェクトにともに取り組み上記5つの施設とは、パートナーとしての関係を続けていく。展覧会や関連するシンポジウムを開催することで、外部に活動をひらき、外からの刺激を受けることで、発展させる。

展覧会では、人類学者や社会学者と共同し、専門的な知識を学び今後のプロジェクトに活かしていく。

- ・「表現の森」展：2016年7月22日－9月25日開催
- ・「表現の生態系」展：2019年10月12日－2020年1月13日（開催予定）

(2) 社会におけるアートの力

アートの力／アーティストの力

アートには自分自身を肯定する力がある。アーティストは、自分なりの個性を肯定する能力が高い。社会には、見えているようで見ていない、聞いているようで聞いていないものも多く存在する。教育や経済などの政治的な理由によって、見えるもの、聞くものが決められている。個人の倫理的な問題だけではなく、社会のシステムの中で、見えなくされている様々な事象が存在しているのである。そういった事象を顕在化・可視化させる力がアートにはある。このようなアートの能力が社会的な包摂を生む。アーティストは、活動を通じて、行政にとって都合の悪い部分を顕在化させるかもしれない。行政にはそうした状況を引き受ける覚悟をもって、アート事業に取り組む姿勢が求められる。

¹⁵ Lesbian（レズビアン、女性同性愛者）、Gay（ゲイ、男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル、両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー、性別越境者）の頭文字をとった単語で、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称の一つ。

弱い立場の人に対して、善意で助けましょう、と言うのではなく、困っている状況をつくっているのは、自分たちであると思えるかどうか、大切なのではないだろうか。自分たちがやってきたことを恥ずかしいと思うことは大切である。

市の職員という観点に立てば、表現の森を通して、行政の仕事だけでは見えない世界を知ることになる。関わる職員の育成は、前橋市にとって意義があり、財産になる。

関わった人々の変化／地域の変容

当初は想像しなかったが、続けることによって、市の職員や施設の職員の意識の変化が見られたという。特に社会福祉施設の職員には、自分たちの仕事はもっと評価されるべきである、という思いがある。アートプロジェクトに携わり、その活動が広く知られるようになることで、充足感を得られることにつながっている。市の職員に関しては、数年ごとに担当部署が変更する状況の中で、社会包摂やアートの視点に触れた人材が育成されていくことは、大きな意義がある。

(3) 実施方法

- ・アーティストの選定／信頼してともに取り組む人材の選出

館長やキュレーター¹⁶、という専門家の視点から国内外のアーティストをリサーチ、選出している

- ・企画、推進する人材／ボランティア等の市民参加

「表現の森」に関しては、プライバシーの観点から、ボランティアスタッフではなく、美術館職員、施設職員が関わることにしている。一方で、美術館の他の事業においては、ボランティアが活躍している。

- ・公教育との関わり

教育委員会との連携、授業枠は図画工作科、美術部などと連携して授業内で実施している。また、コミュニケーション力の観点から、国語科との連携も実績がある。

- ・評価方法

数値的な評価ではなく、事業の振り返りを欠かさずに行うことを大切にしている。事業を定期的に文章化し、ホームページや報告書に発表する、オープンにすることを大切にしている。事業を継続させる、やっていると見えてくることがある。

¹⁶ 学芸員の意。学芸員とは学物館や美術館における専門職員であり、調査、研究、展示、教育活動等に従事する。近年では博物館や美術館以外の施設において、展覧会等の企画・実施を行う人を指して使用するケースもある。フリーランスキュレーターなど。

(4) 芝アートスクールへの助言

- ・港区独自の在り方／都心区での活動の意義

都心区での生活には移動の複雑さなどのバリアが多くある。港区に暮らす人は裕福で健康な人が多いのではないだろうか。それ以外の人との格差に目を向けることが大切である。

(5) ヒアリングの評価

社会包摂の観点から、長期的な視点にたった事業を展開しているアーツ前橋の事例は、共生社会の実現を目指す本事業にとっても、非常に参考になる。冒頭に記載したように、アーツ前橋は美術館構想期より、美術館に来られない人への働きかけを想定しており、開館後も方針が揺らぐことなく、こうした人たちへのアプローチを続けている。少数者の施設や支援団体との連携における留意点など、本事業にとって実践的かつ有益な情報を得ることができた。

事業のアウトプットの仕方に関しては、事業の振り返りを大切にし、継続的に言語化・発信している点もまた重要である。先の筈小学校の江原氏へのヒアリングの際にも、事業に関する情報を発信しつづけることで、関心のある人たちが集い、ネットワークが形成されていくことが重要であるとの意見があった。アーツ前橋の情報発信、アウトプットの在り方とも共通する視点である。本事業においても、こうした事業の成果発信の在り方を参考にすべきである。

2-3. 永田佳之氏（聖心女子大学現代教養学部 教育学科教授／グローバル共生研究所副所長）

ヒアリング概要

日時：2019年7月31日（水）9時－10時

場所：聖心女子大学 永田研究室 東京都渋谷区広尾4-3-1

聞き手：本間友（慶應義塾大学アート・センター／慶應義塾ミュージアムコモンズ）、橋本まゆ（慶應義塾大学アート・センター）

永田佳之氏プロフィール

1962年、長野県生まれ。専門はESD（持続可能な開発のための教育）及び教育分野の国際協力。10年以上にわたり、持続可能性というテーマのもとに海外スタディツアーを毎年実施している他、ユネスコ本部の国際委員としてESDを推進。JICAの草の根支援事業実施に向けてスリランカの学校でESD／環境教育の支援も行っている。『気候変動の時代を生きる：持続可能な未来へ導く教育フロンティア』など著作多数。

（1） 社会的課題の解決と子どもの教育

持続可能な社会のための取り組み

持続可能な社会のためにどのような教育が可能であるか、世界的な規模で様々な取り組みが行われている。永田氏は聖心女子大学教育学科教授であると同時に、同大学グローバル共生研究所副所長も務めている。永田氏の専門はESD(Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育)であり、本事業についてもESDの視点からの評価を頂いた。

日本の子どもたちの自尊感情の醸成の必要性

自身がクリエイティブであると感じているか、というアンケートに対する各国の答えは以下のようになっている。

日本の子ども	8パーセント	日本の大人（教師）	2パーセント
他の先進国の子ども	30～40パーセント	他の先進国の大人	25パーセント ¹⁷

このようなデータからは、日本の子どもも大人もクリエイティビティ(Creativity 創造力)が低い、あるいは、自分自身をクリエイティビティが高いと捉えることへの肯定感の低さが表れている。クリエイティビティの低さが、自尊感情の低さにも繋がっているのではないだろうか。

¹⁷ 数字はヒアリングでの言及より。

背景と要因

学校などのシステムの中で規定されることによって、クリエイティビティが抑制されていくのではないだろうか。実際、不登校の子どもたちが通うフリースクールでは、多くのクリエイティブな活動が取り入れられている。子どもたちは評価にさらされることなく、自身の興味関心に応じた活動に取り組んでいるという。

公教育における問題

評価のまなざしが学校に蔓延している。現在 16 万人以上いるとされる不登校児童・生徒の要因の一つに、こうした過度な評価制度があるのではないだろうか。

学校現場においても、現行のシステムを見直そうという流れはあるが、一方で、学校制度に適応している人ほどこのような考えは希薄であり、なかなか進展しない一因となっている。こうした現状から、本質的にクリエイティビティと深く関わるアートを対象とする本事業が、公教育とは異なる枠組みで実施されることへの大きな期待が寄せられた。

(2) 社会の居場所としての芝アートスクール

子どものみならず、大人の居場所としての芝アートスクールの機能も重要である。子どもの不登校以上に、大人の引きこもりは約 100 万人と遥かに人数が多く、社会問題化している。厚生労働省は引きこもりの大人に対して、労働問題の観点から、生産人口としてどのように働かせるのか、と考えがちである。しかしながら、自然と出かけていける場所、安心して過ごせる居場所を生み出すことが必要なのではないだろうか。そうした場所として、芝アートスクールを位置付けることができるのではないだろうか。

(3) 多文化共生と子どもの教育

社会の変動

異質な他者との共存や気候変動など、これからは不確実性の時代であると言われている。2020 年の東京オリンピック以降、日本においても、異質な他者が隣人になる状況が促進されるだろう。異質な他者との共存の在り方が大切になってくる。そうした状況を踏まえた教育が必要である。これからの社会を生きるためには、異質な他者と冷静に関わり、対応できるマインドセット¹⁸が必要とされるにちがいない。本来ならば学校教育がそのような心の醸成をしなければいけないが、残念ながらできていない。Non-formal¹⁹な教育や生涯教育は急務であり、本事業への期待もまさにこの点にある。

・オリンピックの開催以前より、本事業を通じてこうした課題に向けて歩みを進めている港区は、先駆的である。

¹⁸ 考え方。心構えの意。経験や教育、その時代の空気、生まれ持った性質などから形成されるものの見方や考え方を指す。

¹⁹ Formal な教育、すなわち学校教育に対して、それ以外の教育を指して使用される。

・人間存在を深めるための学びや立ち止まって考えるための空間が必要であろう。グローバルな人材育成を焦点化するのではなく、自分自身がよって立つ場所を大切にしてほしい。

(4) 本事業構想についての意見、アドバイス

港区の特色

港区は富裕層が多い。上層階級はそれぞれのライフスタイルに合わせて、インターナショナルスクールなどへ子どもを通わせている。富裕層以外の子どもをどのように活かしていくのか、応援するのか、という視点が大切である。公教育と緩やかに接続しながら、行政の主導だからこそ、マイノリティをはじめ社会の様々な立場の人たちへと配慮した設計を目指す本事業の意義は大きい。

取り組みの評価方法

楽しかった、満足した、という希望を与えられるかが評価の大切な視点である。この視点は、事業に関わるマイノリティにとっても非常に大切である。

関わる大人の変容

事業対象となる子どもだけではなく、関わる大人の変容もまた重要である。親や教師をはじめとする大人が幸せであること、明るい顔をしていることで、子どもも元気になる。大人が変容する時空間によって、子どもも変容していくのである。

(5) 評価

本事業構想に関しては、公教育とは別様な状況での事業実施への期待が繰り返し述べられた。現状様々に表面化している社会的課題に、公教育が対応し得ていないケースが多々あり、それに取り組んでほしいとの見解が示された。

また、子どもだけではなく、関わる大人の変容を含めて事業を構想していく視点は、先のアーツ前橋のヒアリングでも言及された行政職員や施設職員の変容とも重なるものである。子どもの教育がすなわち、それに関わる多様な大人にとっても意義のあるものであることが、改めて確認された。

聖心女子大学グローバル共生研究所（渋谷区広尾、写真下）は社会的問題を参加型で学ぶスペースを擁しており、共生社会の実現を目指す本事業構想と問題意識を共有している。そのため、本事業構想について非常に強い関心を示して下さった。永田氏には、パイロット事業やプロトタイプ事業のシンポジウム等にご参加頂くといった協力関係も視野に入れたい。



2-4. 三者のヒアリングのまとめ

港区筈小学校の江原氏、アーツ前橋の住友氏、そして聖心女子大学の永田氏へのヒアリングを通して、本事業への共通する見解が示された。すなわち、公教育と緩やかに接続しながらも、公教育とは別様な教育の在り方としての芝アートスクールの存在意義とその役割への期待である。さらに、直接的な講座の対象となる子どもだけではなく、関わる大人にとっても、安心して訪れることのできる社会の居場所の一つとしての機能が、芝アートスクールには求められている。

3. 先進事例

以下の4つの先進事例を調査し、事業構想の参考にした。

・横浜市芸術文化教育プログラム推進事業 横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「アーティストが学校へ」（横浜市）

公教育の枠組みの中での事例として、実施体制及び豊富なプログラム内容を参考にした。

・Minatomachi Art Table, Nagoya (MAT, Nagoya) (名古屋市)

住民と行政との協働によるアートを活用したまちづくりを行っており、地域連携の事例として参考にした。

・NPO 法人 CANVAS

アートのみならず、音楽、映像、メディア、身体、数、食など、多様なテーマでユニークなプログラムを構築し、産官学の連携についても豊富な実績を有するため、公教育以外での幅広い活動の参考とした。

・レッジョ・エミリア幼児教育（レッジョ・エミリア市、イタリア）

アートの創造的体験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出す特徴をもち、その教育方法は世界的に注目を集めているため、海外の次世代育成事例として参考にした。

3-1. 横浜市

横浜市芸術文化教育プログラム推進事業 横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「アーティストが学校へ」

3-1-1. 選定理由

公教育の枠組みの中での事例として、横浜市芸術文化教育プログラム推進事業は15年の活動継続実績があり、実施体制及び豊富なプログラム内容が芝アートスクール事業の実現の参考に値すると考えるため。

3-1-2. 運営体制と目的

横浜市芸術文化教育プラットフォームは、特定非営利活動法人 ST スポット横浜、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市教育委員会、横浜市文化観光局が運営を担い、ST スポット横浜が中心となって事業を推進している。事業を推進するにあたり、横浜の次世代を担う子ど

もたちのコミュニケーション力と創造力を育み、豊かな心を養うことを事業の目的としている²⁰。

3-1-3. 実施概要

規模

平成16年度から事業を開始。14年間（平成29年度時点）でのべ約1,100校・13万人を超える児童・生徒に実施。平成29年度は小学校126校、中学校6校、特別支援学校8校の合計140校14,887人に実施し、実施に関わった団体は39団体²¹。

実施体制

実施にあたっては、事務局が選定したコーディネーターが学校からの要望（実施日程、実施内容など）を聞き取り、最適な実施内容となるよう学校と調整を行っている。（実施体制の構成については添付資料1を参照。）また、コーディネーターが集まり情報交換を行う「コーディネーター会議」の実施や、教員プログラムとして先生のためのワークショップを実施。さらに、学校のカリキュラムに活かしたいと考える学校関係者や、プログラムに参加したいと考えるアーティストのための窓口を設置し、随時相談を受けている。

3-1-4. 連携のしくみとねらい²²

1. 学校現場の実状に応じ、カリキュラム上での位置付けを行うための体制づくり
2. 様々な実施主体、関係団体を結ぶネットワーク
3. 子どもたちにとって効果的なプログラムの提供及びプログラム実施に関する調査研究や人材育成

3-1-5. 実施プログラム概要

3日間にわたりアーティストとともに創造活動に取り組む体験型プログラムと、アーティストによる演奏やパフォーマンスを鑑賞する鑑賞型プログラムの2種類のプログラムを用意。音楽・演劇・ダンス・美術・伝統芸能²³の5分野を扱う。

²⁰ 横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局『横浜市芸術文化教育プログラム推進事業 横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「アーティストが学校へ」平成29年度事業報告書』p. 6.

²¹ 同上、p. 6、p. 8

²² 同上、p. 7.

²³ 古くからあった芸術と技能の汎称。特定階級又は大衆の教養や娯楽、儀式や祭事などを催す際に付随して行動化されたもの、又は行事化したものを特定の形式に系統化して伝承又は廃絶された、有形無形のことを言う。

実施例

プログラム名：「非日常の空間で体験するアート」

担当アーティスト：MATHRAX（アートユニット）／ゲストアーティスト：石神ちあき（ダンサー）、宮内康乃（作曲家）

実施校：上菅田特別支援学校（保土ヶ谷区）

コーディネーター：認定NPO法人 ST スポット横浜

実施対象：高1～3学年 11名

プログラムのねらい

「感覚を媒体とした身体意識の形成」「社会性、認知、コミュニケーション能力の拡大」を重点に、音や光、手触りや香りなどの体験を楽しむ。

内容

- 1日目：触れると振動と共に音が鳴り、周囲のスピーカーと連動して光や音が鳴る円盤状の木の作品を使って、身体全体で音や光、他の人とのセッションを楽しむ
- 2日目：色の変化する光のオブジェと音の作品、ダンサーとのパフォーマンスを鑑賞
- 3日目：先生に声を使って音響づくりに参加してもらい、音と光のプロジェクションを楽しむ、生徒も一緒に声を出し音風景をつくる
- 4日目：触れると音や香りの出る木のオブジェを使って、音や香りが混ざり合っていく変化を体験、一人ひとりの発する声や音をマイクで拾いループさせて音楽を楽しむ



上菅田特別支援学校におけるワークショップの様子

出典：横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局『横浜市芸術文化教育プログラム推進事業 横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「アーティストが学校へ」平成29年度事業報告書』

3-1-6. 評価

・多彩なプログラムの実施

→多くのアーティストが関わることで、アーティストによって内容が異なる多彩なプログラムが実現されている。

・学校現場、コーディネーター、アーティストの綿密な連携

→文化芸術分野の専門知識を持つコーディネーターが、対象となる学年と教科・科目のねらいや普段の学校の様子を先生と共有し、コーディネーターの専門知識と合わせることで効果的なプログラムをオーダーメイドで実施している。

→アーティストの事務的負担を軽減させプログラムの準備に専念させることができる。

・機会均等の確保

公教育の中で、子どもたちの誰もがアーティストに出会う機会をつくることができる。

3-2. 名古屋市

事業名 Minatomachi Art Table, Nagoya (MAT, Nagoya)

3-2-1. 選定理由

「Minatomachi Art Table, Nagoya」事業は、住民と行政との協働によるアートを活用したまちづくりを実施するにあたり、「港まち²⁴」という土地の歴史と特性を踏まえた活動を行っており、芝アートスクール事業構想との共通性がみられるため。

3-2-2. 運営体制

名古屋港エリアでまちづくりを推進する「港まちづくり協議会」が母体となり、『Minatomachi POTLUCK BUILDING』を拠点に名古屋の港まちをフィールドにしたアートプログラムを実施。アイデアや企画を持った担い手の参入を促進するため、提案公募型事業も実施している。

港まちづくり協議会

地域内外の人に誇れる「なごやみ（ん）なとまち」を目指し、2006（平成18）年より名古屋の港まちエリアで住民と行政との協働によるまちづくりの活動を行っている団体。（構成員については添付資料2-1を参照。）「暮らす、集う、創る」をテーマに、防災、子育て、ガーデンプロジェクトなどの各種のコミュニティ事業、アートプログラムなど、様々な事業を展開。名古屋市が策定した「港まち活性化の方針」に基づき、地域の意向を取りまとめて名古屋市に事業の実施を要望するとともに、港まち活性化補助金を活用し、各種の協議会事業を実施

²⁴ 港を中心として発達した町。

²⁵。(2017年度の会計報告については添付資料2-2を参照。)翌年度の事業内容を検討する事業計画作成部会には、協議会委員に加えて地域の中から公募した部会員も参加し、意見交換を行っている²⁶。

拠点

名古屋市港区にある築地口商店街の文具店だったビルを再生し、港まちづくり協議会の拠点スペースとしてMinatomachi POTLUCK BUILDINGを設置。4階建てのビルに、情報拠点としてのラウンジ・スペース、イベントやワークショップに使用するプロジェクト・ベース、展覧会を実施できるエキシビジョン・スペース、港まちづくり協議会の事務局オフィスを有する²⁷。

3-2-3. 理念

「Minatomachi Art Table, Nagoya」事業は、1980年代以降様々な国際的な現代アートの活動が行われてきた名古屋港周辺の素地を受け継ぎ、創造性をもって活動する人々を歓迎し、制作・実践の場を創出することによって創造的なアイデアをまちに還元していくことを目指している。異なった価値観や他者を受け入れてきた港まちの多様性がさらに広がることを期待し、アートを軸とした事業に取り組んでいる²⁸。

3-2-4. 実施概要

現代美術の展示やスクールプログラム、空き家を資源として活用する「WAKE UP ! PROJECT」などのプロジェクトを展開。

実施例

① プログラム名：「MAT, Nagoya Studio Project vol. 4」

・概要

港まちエリアでアーティストやデザイナーの制作・発表をサポートするプロジェクト。Minatomachi POTLUCK BUILDINGの3階にてアーティストが2ヶ月間滞在し、制作現場の公開とアーティストによるイベントを開催。「Chap Books Club」リーダーの川村格夫氏滞在中、いつでも立ち寄って小冊子をつくることのできる企画を実施。

・スタジオ滞在期間

2018年7月14日(土) - 8月24日(金)

公開日：スタジオ滞在期間中の金曜、土曜

²⁵ 『港まちづくり協議会 2017年度報告書』港まちづくり協議会、2018年、p. 6.

²⁶ 『み(ん)なとまち VISION BOOK 2013-2018』港まちづくり協議会、2013年、p. 8.

²⁷ 『港まちづくり協議会 2017年度報告書』p. 7.

²⁸ Minatomachi Art Table, Nagoya ホームページ (<http://www.mat-nagoya.jp/>)

公開時間：11：00-19：00

入場：無料

・オープンスタジオ期間

2018年8月25日（土）-9月15日（土）

休館日：日曜、月曜

時間：11：00-19：00

入場：無料

② プログラム名：「potluck school 2017 vol.3 竹内厚「編集者の仕事ってなんだろ
うー港まちの新しいフリーペーパー制作を通して」」

概要

POTLUCK SCHOOL（ポットラック・スクール）は、名古屋の港まちでこれからの「まち」についてみんなで考えるスクール。アイデアや知恵、それぞれの地域の問題や宿題を持ち寄って共有し、楽しく学ぶことを目指している。2017 vol. 3では港まちのフリーペーパーの制作編集に携わる編集者が制作プロセスについてトークを行い、参加者と地域のフリーペーパー制作について共有している。

開催日：2017年9月8日（金）

時間：19：00-20：30

会場：Minatomachi POTLUCK BUILDING 1F：Lounge Space

料金：500円

3-2-5. 評価

地域との緊密な連携

事業内容検討の際に地域住民との意見交換を行うなど、住民の意向を取り入れながら、行政と住民の連携によって活動を展開している。

拠点の活用

地域の空き家を活動拠点として積極的に活用し、誰でも・いつでも集うことのできる場を創出している。

地域の特徴を活かしたプログラムの実施

地域にかかわるプログラムのテーマを設定し、住民が地域について見直し、魅力を再発見するような機会をつくりだしている。

3-3. NPO法人CANVAS

3-3-1. 選定理由

CANVAS のプログラムは、アートのみならず、音楽、映像、メディア、身体、数、食など、領域が多岐にわたり、諸領域を横断する内容となっている。また、産官学の連携についても豊富な実績を有するため、芝アートスクール事業の参考とする。

3-3-2. 理念

CANVAS は、経済がグローバル化し、大量の情報が国境をこえて行き交う時代において、情報を取捨選択し、再構築し、新たな価値を生み出す力を養うため、異なる背景や多様な力を持つ子どもたちがコミュニケーションを通じて協働する学びの場をつくることを目指している²⁹。

また、情報化時代に適した学びの環境を構築するため、プログラミングをはじめ最新の技術を使って、新しい学びの場「デジタル寺子屋」の実現を目指している³⁰。

3-3-3. 運営体制

NPO法人CANVASは、2002年2月に石戸奈々子氏によって台東区谷中に設立された。石戸氏は東京大学工学部卒業後、マサチューセッツ工科大学メディアラボ客員研究員を経て、現在CANVASの理事長。CANVASの人員構成については次を参照。

<http://canvas.ws/player#director>

3-3-4. 実施概要・実施分野

アーティスト・専門家と共に開発した300種類以上のプログラムを実施。実施分野は次の通り。言葉・物語／数・単位／身体表現／造形／絵画／ファッション／デザイン／デジタル／伝統・芸能／プログラミング／電子工作／サイエンス／映像／音楽／国際／メディア／まち／食／環境・自然

²⁹ CANVAS のホームページ (<http://canvas.ws>)

³⁰ 商工会議所の検定試験サイトにおけるインタビューより (<https://www.kentei.ne.jp/interview/24222>)

実施例

① ほうかごクリエイティブプロジェクト

児童館・学童クラブ等 500 の放課後施設にワークショップの実施やプログラムの提供を行う。家族と、学校の先生と、放課後施設の先生と一緒に子どもたちを育ていけるように、プレイヤーの紹介・ワークショッププログラムの提供などを行っている。

【活動項目】

1. プレイヤー（ファシリテーター³¹、クリエイター等）
2. プログラム提供
3. 素材・道具の提供、貸出

【主な活動】

- ・ 1～3 トータルでの支援
- ・ 1～2 のみの支援

【プログラム例】「10000 個の紙コップの造形」

10000 個の紙コップを使って、ひとりで作ったり、みんなで作ったり、積んで、並べて、名前のあるかたち・名前のないかたちを作るプログラム。一度に大人数のこどもたちが参加可能。

② NECキッズ

CANVAS と日本電気株式会社（NEC）が協働し、次世代を担う子どもたちを応援するプロジェクト。携帯電話やパソコンなど、最先端の情報通信技術を活用したクリエイティブな体験を通じて、デジタル時代の夢や可能性を伝えることを目指している。

【プログラム例】「NEC キッズ広報部 アニメ CM 制作ワークショップ」

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館 6 F 「グローバルスタジオ」

日時：2009 年 8 月 27 日～29 日 10：00～16：00

対象：小学生 3 年生～6 年生

定員：20 名

<当日の流れ>

1. 挨拶

3 日間のスケジュールとクレイアニメの仕組みについて説明。

2. ガイダンス

担当の NEC 社員が、今回 CM にする NEC の携帯、パソコン、人工衛星の製品の特徴を説明。

³¹ 促進する、という意味の英語 facilitate が語源。アートに関するワークショップでは、参加者同士の対話を促し、その場の状況を整理しながら、進行を促す人を指して使用される。

3. プランニング

グループのみんなで製品の特徴や可能性について話し合い、CMの構想を練る。わからないことはNECの社員に質問することができる。

4. 粘土のキャラクターづくり

粘土をつかってキャラクターをつくる。

5. 撮影

パソコンとカメラをつかって1枚1枚コマ撮りをする。

6. 録音

作品に声をいれる。

7. 編集

パソコンをつかって作品を仕上げる。

8. 上映会

完成した作品を映画館のように上映し、みんなで鑑賞。最後にNEC社員からコメントをもらう。



CANVASによるワークショップの様子。

出典：石戸奈々子『子どもの創造カススイッチ！遊びと学びのひみつ基地 CANVAS の実践』フィルムアート社、2014年

3-3-5. 評価

デジタル技術の活用

デジタル技術による創作活動は、工作が苦手な子どもでも協力して取り組みやすく、また多様な表現や手法を生み出す可能性をもつ。

ワークショップの普及

「ほうかごクリエイティブプロジェクト」のように、ワークショップをパッケージ化し、各施設・各地域がプログラムに取り組みやすいような配慮を行っている。その結果、CANVASのプログラムは学校や文化施設、商業スペースなど、多くの施設に導入されている。芝アートスクール事業において、今後多くの場所でプログラムを実施する上で参考になると考える。

3-4. レッジョ・エミリア幼児教育

3-4-1. 選定理由

レッジョ・エミリア幼児教育は、アートの創造的体験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出す特徴を持ち、その教育方法は世界的に注目を集めている。レッジョ・エミリア幼児教育は、子どもの発想力、想像力、表現を育て、次世代育成を目指す本事業にとっても参考になると考える。

3-4-2. 背景と教育思想

レッジョ・エミリア幼児教育は、戦後間もない時期に北イタリアのレッジョ・エミリア市で地域の共同保育運動として始まった教育アプローチ。教育家ローリス・マラグッツィ（1920-1994）の指導と市のバックアップにより基礎が築かれた。主に未就学児を対象としている。

レッジョ・エミリア幼児教育では、子どもたちを一市民と捉え、教育は市民の義務であると考えている。保護者や学校は子どもの教育について研究者であるべきであり、子ども自身も、あらゆるものを主体的に探求する研究者であると捉えている。また、子どもの興味関心や考え方は100人100色で、その教育手法は一つに定めることができないという教育哲学をもつ。

3-4-3. 特徴

運営体制

・アトリエスタ（芸術専門家）とペダゴジスタ（教育専門家）を各乳児保育所と幼児学校に配置している。

・施設を中心に食堂と各教室に連続するピアッツァ（広場）を設け、そのピアッツァと連続してアートの活動を促す「アトリエ」をおいている。アトリエには絵具、筆、紙、種、葉、小石、ボタン、ガラス玉などの百を超える素材が細かく分類されて準備されている。

・子どもたちが取り組んだことやそこでの気づき・感想などの記録は、子ども自身の文章や絵、写真などによって精緻に表現され、「ドキュメント」として保存される。保護者・保育者にとって子どもたちが制作したドキュメントは、子どもたちを理解し次の学習を支援するための重要な手がかりとなる。

・親と教師が子どもの発達について学び合う月例会がもたれている。数か月に一度、親と市民が一同に集まって話し合い、基本方針が議論されている。

※ レッジョ・エミリアの時間割と教職員の編成、レッジョ・エミリア市行政における教育サービスネットワークについては添付資料3-1、3-2を参照。資料は佐藤学ほか訳、『子どもたちの100の言葉』2001年からの転載。

実施内容

- ・子どもたち自身でデザインして作った光をつかまえる装置で光の通り道をつくるなどの光のプロジェクトや、様々なモノの紐や糸を集めて音の彫刻をつくる音のプロジェクトなどが行われている。
- ・「デジタルは教育と学習の文脈を変え、子供たちの考えや理論に新しい表現方法を提供し、理論面と技巧面を融合させることができる文化の次元を提案する可能性を秘めている³²」と考えており、デジタルアトリエ等の発想もリードしている。



レッジョ・エミリア市のワークショップとアトリエの様子。

出典：驚くべき学びの世界——レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS、2011年



3-4-4. 日本への影響

日本においても、レッジョ・エミリア幼児教育に多くの人々や団体が影響を受けている。東京大学名誉教授の佐藤学氏は、1989年にボストン市公会堂で開催されていた「子どもたちの100の言葉」展を鑑賞し、そこで見た子どもたちの作品と教育実践の記録に感銘を受け、以来レッジョ・エミリア幼児教育を日本の人々に紹介している。2001年には東京のワタリウム美術館

³² <https://www.reggiochildren.it/atelier/digital-landscapes>

で「子どもたちの100の言葉」展が開かれ、その実践が多く日本の教師や学生、市民に知られることとなった。また、レッジョ・エミリア幼児教育を実際に取り入れて保育実践を行っている園もある。下記がその一例である³³。

- ・まちの保育園 小竹向原・六本木・吉祥寺
- ・まちのこども園 代々木上原・代々木公園
- ・オルト保育園（新宿区）
- ・東京チルドレンズガーデン（品川区）
- ・横浜インターナショナルスクール（横浜市中区）

横浜インターナショナルスクール（横浜市中区）の場合

横浜インターナショナルスクールは、1924年に神奈川県横浜市中区の山手にある横浜の外国人コミュニティによって設立された学校。3、4歳児のクラスでレッジョ・エミリア幼児教育の実践を取り入れている。レッジョ・エミリアのように0～5歳クラスの実践ではなく、3、4歳児クラスの実践であり、またレッジョ・エミリアが市立の保育であるのに対し私立の園であり、インターナショナルスクールであることから、多文化の背景をもった子どもたちと保護者が通っている³⁴。横浜インターナショナルスクールではこれらの違いを認識し、レッジョ・エミリア幼児教育の思想や教育方法をそのまま同校に取り入れるのではなく、レッジョ・エミリア幼児教育の哲学を継承しながら、横浜インターナショナルスクールに合った実践を追求している。このような取り組みでは、レッジョ・エミリアの思想に触発されながらも、それぞれの園の属するコミュニティの文化的・歴史的な価値や信念を反映した教育こそが重要と考えられている。

3-4-5. 評価

取り組みに関する記録の蓄積と開示

日々の取り組みが丁寧に記録され、教育資源として活用されている。その記録は親にも共有されると同時に、市民も教育方針の議論に参加できるというオープンな体制をつくっている。

現代における共同体的思想の果たす役割

東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美氏は、レッジョ・エミリア幼児教育に日本が学ぶことの一つとして共同体的思想を挙げている。地域に根差した園として子ども一人ひとりを大事にしてきた日本の保育哲学を基礎にしながらも、レッジョの共同体的な思想、子どもが

³³ まちの保育園・こども園 (<https://machihoiku.jp/>)
オルト保育園 (<http://www.shineikai.or.jp/orthoikuen.html>)
東京チルドレンズガーデン (<https://www.tokyochildrensgarden.com/>)
横浜インターナショナルスクール (<https://www.yis.ac.jp/>)

³⁴ カンチェーミ・ジュンコ、秋田喜代美編『GIFTS FROM THE CHILDREN 子どもたちからの贈りもの—レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践』萌文書林、2018年、p.12.

示す可能性から地域の人と共に聴き学ぶことでつながりあうコミュニティを創る可能性は、ネットワークの時代、人の絆が閉じられがちな時代だからこそその営みを考える一つの示唆になる³⁵と考えている。

参考文献

- ・佐藤学ほか訳、『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、2001年
- ・『驚くべき学びの世界——レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS、2011年
- ・『発達 第156号』ミネルヴァ書房、2018年
- ・カンチェーミ・ジュンコ、秋田喜代美編『GIFTS FROM THE CHILDREN 子どもたちからの贈りもの——レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践』萌文書林、2018年

³⁵ 秋田喜代美「なぜいま、あらためてレッジョ・エミリアか」『発達 第156号』ミネルヴァ書房、2018年、pp. 2-7.

4. (仮称) 芝アートスクールの理念と目的 (案)

目的

港区芝地区は東京の中心地に位置し、多種多様な企業の本社や大使館といった経済・外交の拠点が集結していると同時に、豊富な人的・歴史的・文化的資源を有している。本事業は、このような芝地区の潜在的な資源の豊かさを活用し、アートと掛け合わせることで、芝地区ならではのアートによるまちづくり・地域コミュニティの形成を促進し、次世代育成と共生社会の実現を目指していく。具体的な取り組みとして、子どもを対象とする芝アートスクールの開催及び運営を推進する。

社会におけるアートの力

社会におけるアートの力について考察するためには、はじめに芸術とアートの定義を確認したい。芸術について、美学者³⁶の佐々木健一³⁷氏は「人間が自らの生と生の環境とを改善するために自然を改造する力を、広い意味での art (仕業) という。そのなかでも特に芸術とは、予め定まった特定の目的に鎖されることなく、技術的な困難を克服し常に現状を超え出てゆこうとする精神の冒険性に根差し、美的コミュニケーションを指向する活動である。」³⁸と定義している。つづけて、ジャンルとしての芸術として、文学、音楽、造形美術（絵画、彫刻、建築、デザイン）、演劇、舞踊、映画を挙げて、芸術とはこれらの総称、類概念であるとしている。一方で、アートとは、既存のジャンルに収まりきれない多様な表現活動を示して使用される。例えば、現代芸術（メディアアート³⁹、バイオアート⁴⁰）や芸術家以外の創り手によるアート、障害者など伝統的な美術教育を受けていない人の作品（アウトサイダー・アート）、料理、ファッション、工業製品などである⁴¹。本事業は子どもや区民の表現活動を対象としており、このような広い意味でのアートに連なるものであると言える。

さらに社会におけるアートには、多様で自由な見方を認める文化的寛容さや、新しい価値観との出会いを可能にする力がある。アートの活動を通じて、他者の創造力や表現力を認め合うことで、豊かなコミュニケーションが生成されるに違いない。共生社会を目指す本事業においては、アートのこのような力が大きな助けになる。

³⁶ 哲学の一分野である美学の研究者。例として、カントやヘーゲルなどの美学理論を研究する。

³⁷ 1943 年生まれ。日本の美学者、東京大学名誉教授。佐々木氏の主著『美学辞典』（東京大学出版会、1995）は、美学に関する重要な用語を古今東西の概念を横断しながら記述しており、美学・美術史学を学ぶ学生にとって、必読の書である。

³⁸ 「芸術」佐々木健一『美学辞典』、東京大学出版会、1995 年、p. 31

³⁹ 明確な定義が共有されにくいために数多くの問題を生み出している用語であるが、本稿においては、デジタル・データによる表現全般を指す用語として、コンピュータ・アート、ソフトウェア・アート、インタラクティブ・アート、ニュー・メディア等の用語と並列に用いる。参考：現代美術用語辞典 ver. 2.0 <https://artscape.jp/artword/index.php/メディア・アート>

⁴⁰ 遺伝子や細胞を材料に、科学的（バイオテクノロジー）な操作を交えて制作するアート。

⁴¹ 中村美亜「アートと社会を語る言葉」、九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』水曜社、2018 年、p. 27

本事業の効果として、大きく以下の4点が挙げられる。

- (1) 共生社会の実現
- (2) 次世代人材育成
- (3) エンパワメントの生成
- (4) 世代間交流

(1) 共生社会の実現と(2) 次世代人材育成／なぜ子どもなのか⁴²

本事業は子どもを対象とするアートスクールの開催・運営に取り組むものであるが、目的に示した通り、人材育成と共生社会の実現を目指している。どのような人材を育成したいのか、という問題意識は、共生社会の実現と深く関わっている。文部科学省による定義を参照するならば、共生社会とは、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、だれもが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。」⁴³とされる。こうした共生社会と近い考え方として、社会包摂が挙げられる。社会包摂とは、「障害のある人を無理に一般の基準にあてはめるのではなく、違いのある人たちを、違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうという考え方」とされ、社会包摂の対象には、障害のある人だけではなく、貧困を抱える人、移民・外国人、高齢者、LGBT、病気を抱える人、災害の被災者など、さまざまな少数者が含まれる。⁴⁴

本事業では子どもたちを対象とし、次世代のための人材育成を大きな目的の一つとしているが、社会における多様な立場の人々について想像し、配慮することのできる人材を育成したいと考えている。このような観点から、事業の計画・実施に際しては、関係機関と連携し、多様な立場の人の参加を実現する。

本事業を通して、発想力、創造力、表現力を培う豊かな学びを体験した世代が、十年後、二十年後の社会の担い手となっていく。将来の社会が、多様な人々にとって生きやすく、居心地よく、安心して暮らせる、一人ひとりが自分自身を表現できる、一人ひとりの物語が大切に語られる、そうした社会であり続けるためには、各世代一丸となって、次世代育成に向き合い取り組む必要がある。

⁴² 本事業では子どもを公教育課程である小学校・中学校の学齢に相当するものとするが、事業の対象者には、高等学校在校生の参加も含むものとする。

⁴³ 政策・審議会 > 審議会情報 > 中央教育審議会 > 初等中等教育分科会 > 初等中等教育分科会(第80回) 配付資料 > 資料1 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1 > 1. 共生社会の形成に向けて、より

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325884.htm

⁴⁴ 「文化と社会包摂」文化庁 × 九州大学共同研究チーム編『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、2019年、p. 22

(3) エンパワメントの生成

実施にあたっては、芝アートスクールの受講生としての子どもだけではなく、講師やボランティアとして関わる様々な人への影響を大切にする。アーツ前橋の住友氏へのヒアリングにおいても確認されるように、アート活動を支える行政や施設の職員、ボランティアスタッフの自己肯定感の高まりといった意識の変化が副次的効果として期待される。アートの活動に直接関わった人に影響を与える二次的効果として、九州大学ソーシャルアートラボの中村美亜氏は、エンパワメントを挙げている。エンパワメントとは、心理学的に言えば、自分には価値があると感じる（自己肯定感／自尊感情）、やりたいことができる気がする（自己効力感）、何かやってみてみたいと思う（意欲）などのポジティブな感情が生み出されることを指すという⁴⁵。

子どもたちをはじめ、本事業に携わった人たちそれぞれのポジティブな変化が一つ一つ積み上げられて、やがて大きなエネルギーとなり、共生社会の実現へ向けての原動力となるに違いない。

(4) 世代間交流

本事業によって期待される効果として、まずは地域の活性化が挙げられる。芝アートスクールを契機として、様々な人が集い、創造的活動を共有する場が生成される。講師として参加する芸術家やアート・ディレクターなどの多彩な才能に活動の場を提供することができる。実施にあたっては、公教育や部活動の一環として、あるいは企業、在勤者、在住者、少数者の参加といった多様な主体との連携を計っていく。地域の文化振興を促進するためには、新しさを追求するだけでなく、その地域に関する文化的価値の継承も重要である。子どもたちが多様な世代と出会い、交流することで、各世代に内面化されている文化的な事象を伝達しあう場が生成されることもまた、期待される。

公教育と芝アートスクール

地球温暖化、情報化社会の成熟、生活や仕事における人工知能の実用化など、今後数十年の近い将来、いままでに人類が経験したことのない社会が到来する。そうした社会を担っていく将来の世代には、前例のない、すなわち答えのない問いにも取り組む力、未知の状況にあっても、粘り強く思考し、努力を重ねて、打開していく力、しかも、一人よがりではなく、他者の声に耳を傾け、協力して問題・課題に取り組む姿勢が求められていることは、言をまたない。直面したことのない困難な状況を切り開いていく力が求められているのである。

⁴⁵ 中村美亜、前掲書、p. 35-36.

公教育において、このような観点・問題意識からの教育の改革が進行している。2017（平成29）年度に公示された新学習指導要領では、「対話的で主体的な学び」が提唱され、アクティブ・ラーニング⁴⁶の視点からの授業改善が行われている。本事業構想もこのような公教育と問題意識を共有するものであるが、さらに、企業や地域の方、高齢者、障害者やLGBTなどの少数者といった多様な主体と連携・実施することで、公教育とは別様な、港区芝地区ならではの特性を活用した学びの場を創出していきたいと考えている。

本事業は「スクール」という名称が示すように、単発のイベントではなく、本事業のために考案された独自のカリキュラムを軸に展開される、いわば寺子屋や私塾のような形での運営を想定している。運営方法としては、放課後に開講するなど、公教育と接続する形を想定している。

芝アートスクールの展望

本事業では、「アートスクール」という仮称をかかげており、パイロット事業、プロトタイプ事業においては、アートを対象とするプログラムを実施し、その成果を測定し、長期的な運営に活かす。将来的には、多様な領域における創造・表現活動に子どもたちが取り組むことのできる場を生み出すことも視野に入れている。

また、本事業ではアートスクールを通じたコミュニティ形成を行い、その結果として芝地区の魅力高め、さらにその魅力を全国規模で発信していくことも意図している。情報発信力に関しては、港区は民放のキー局が本社を置き、また大手通信会社の本社も擁する。こうした情報発信力を本事業においても活用していく。

本事業は、行政による公教育を補完する新たな学びの場として、先駆的な取り組み・モデル事業となる。芝地区がより活性化すること、さらに、まちの魅力を内外に向けて発信していくことで、人の集まる好循環を生み出し、次世代に向けてより良い社会を残していくことを目指している。

⁴⁶ 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。参考：文部科学省「用語集」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

5. 事業基礎情報

5-1. 事業実施の対象者像

本事業の対象

本事業の対象者は、スクールの生徒と講師の大きく2つに分けることができる。「生徒」という表現に関しては、本事業が社会包摂や世代間交流、持続可能な co-learning（相互的な学びの在り方）環境の構築を目指しているため、生徒と講師の役割の固定化は望ましくないが、事業対象者といった意味で、ここでは便宜的に生徒と講師と呼称する。

児童・生徒

- ・芝地区管内の小学校、中学校、高等学校在学者（6歳から18歳）
- ・学童クラブ利用者

生徒に関しては、港区立筈小学校の江原氏へのヒアリングから、公教育のみならず、学童保育におけるニーズや実現可能性が確認されている。江原氏からは、公教育でできることがすべてではないという認識が示されており、学校、家庭だけではなく、様々なところに子どもたちの居場所がある社会が豊かな社会であるという観点から、「放課後の居場所」としてのアートスクールを想定し、学齢期の子どもたちを主な対象とする。

講師

2種類：アーティストとプロボノ

- ・アーティスト（有償）

少数者を含む地域の多様な人々の関わりや、文化や歴史への綿密なリサーチを軸に活動を展開するアーティスト

- ・プロボノ

大学生、区内在勤者、区内在住者に講師やファシリテーターとしての活躍の場を提供する。

プロボノ講師について

在勤者の本事業への参加を促すために、プロボノ講師の可能性を提案する。プロボノとは、職務上の専門的な知識や経験、技能を、社会貢献のために無償若しくはわずかな報酬で提供するボランティア活動を意味する。ラテン語の pro bono publico（公益のために）の略。1908年にアメリカ法曹協会（ABA: American Bar Association）がその倫理規範中に弁護士⁴⁷の奉仕活動を規定し、低所得者向けにはじめた無料の法律相談を源流としている。日本では東日本大震災に際し、医療や看護、社会福祉、輸送、建築など多くの分野で専門家や組織による支援が行われたことで広く注目を集め、プロボノ関連団体が数多くつくられた⁴⁷。

本事業に関する調査ヒアリングにおいて、企業アート・ディレクター⁴⁸の場合、講師としての事業参加への意欲、モチベーションは潜在的にあることが確認されている⁴⁹。日々、働き多くの時間を過ごす地域＝芝地区への還元／地域振興への寄与は参加への強い動機になるといえる。プロボノ参加にあたっては、講師の立場だけではなく、あるプログラムに子どもたちと一緒に取り組むこと／取り組む姿を通じて、自身の持っている専門性、技能を伝えるという参加の仕方も可能である。専門性や技能を活用するという観点から、本事業では、在勤者に限らず、大学生や大学院生も参加できるようにする。

参加への動機付け

- ・区からの正式な依頼や感謝状が整っていること
- ・負荷のない形での関わり

プログラムの考案といった事前準備や、実施後の報告などの作業が発生せず、手ぶらで現場へ行き、身一つで参加できる枠組みが必要である。謝礼の形ではなく、必要経費の補償があることで、参加のしやすさが促進されるとの意見も出ている。

- ・港区のプロボノ講師ディレクトリ⁵⁰への登録

プロボノ活動を行いたい在勤者や学生に向けた講師管理登録システムを設計する。職業、専門性技能、活動可能日などを登録し、本事業の実施カリキュラムとのマッチングを効果的に行う。港区の人材の豊富さを示すことにもなる。

⁴⁷ 小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)、コトバンクより(2019年7月26日アクセス)

<https://kotobank.jp/word/プロボノ-188880>

⁴⁸ 企業に在籍するアート・ディレクターのこと。電通などの広告会社には社員としてのアート・ディレクターが多数在籍している。アート・ディレクターに関しては、註4を参照。

⁴⁹ 以下、アート・ディレクターに関する情報は、株式会社電通のクリエイティブ・ディレクター平石洋介氏へのヒアリングに基づく(ヒアリング実施日、2019年6月24日)

⁵⁰ プロボノ講師として活動したい人を登録した管理情報。個人情報に配慮しつつ、インターネット上で閲覧可能なシステムを設計する必要がある。

講師人材の循環的育成

事業に参加した子どもたちが、成長して講師として帰ってくるころまでを視野に入れた長期的な実施が望まれる。

既存の教育に対する本事業の位置付け

芝アートスクールは、既存の公教育や公教育の周辺にある既存の学びの場と緩やかに接続する。公教育との関わりでは、図画工作科、社会科、総合的な学習の時間や課外授業等を利用した開講が挙げられる。一方の既存のサービスとの接続に関しては、学童保育や部活動との連携が考えられる、既存のニーズを取り込むことにより、事業の対象となる層に情報を届けるとともに、既に類似の関心を持ち動している人たちとの協働を促進する。

5-2. 事業実施場所

場所を限定せず、公共施設、学校、企業提供スペース、大使館、商店街等の様々な場所で事業を実施する。異なる場所をアートスクールという枠組みでつないでいくことにより、地域の場所をベースとしたコミュニティ同士の交流を促進する。同時に、場所／会場に紐付いた文化や歴史を顕在化することができる。一例として、大使館は、その国の文化発信や文化交流に資する事業であれば場所の提供は可能である。

実施場所例

・幼稚園・学校

赤羽幼稚園、御成門小学校、芝小学校、赤羽小学校、三田中学校（各学校の園児・児童数については添付資料4を参照。）

・学童保育

神明子ども中高生プラザ、放課GO→クラブおなりもん、放課GO→クラブしば、放課GO→クラブあかばね、新橋学童クラブ

・公共施設

区民協働スペース、商工会館、三田いきいきプラザ、神明いきいきプラザ、虎ノ門いきいきプラザ

・企業の共有スペース

電通、ソフトバンク：株式会社電通のクリエイティブ・ディレクター平石洋介氏へのヒアリングから、区からの要請があれば、企業共有スペース提供の可能性も示唆されている。また、ソフトバンクは2020年に本社の竹芝地区への移転を発表している。

・アートに関係する老舗

株式会社佐山製作所（新橋4-26-7）、有限会社大角印刷所（虎ノ門1-8-5）

芝地区には、多くの大手企業の本社があると同時に、明治・大正期より続いてきた老舗が少なからず残っている。洋家具発祥の地でもある芝地区で家具製作を続けてきた佐山製作所や、虎ノ門で唯一の活版印刷所となった大角印刷所などは、芝地区の歴史を見直し、魅力を再発見する場所である。

・寺社

光明寺（虎ノ門）、龍源寺（三田）、明福寺（三田）ほか

事業拠点の必要性

本事業が本格的に始動するためには、将来的には事業拠点の設立が望ましい。拠点を設定することにより、地域における事業の定着化、プログラムの恒常的实施への取り組みやすさが促進される。既にある建築物の再利用や用途変更が考えられるが、子どもをはじめ、人々が集まりやすく、親しみやすい空間設計であると同時に、地域に根付く設計が必要である。

①空間

- ・創作スペース
- ・展示スペース
- ・事務所
- ・その他

②拠点の活用方法

- ・アートスクールに関する情報を集約
- ・関心のある人をケアする／相談員の配置
- ・表現の場としての活用

③候補

港区既存の公共スペース

5-3. 事業実施時期

地域コミュニティの中で役割を担うためには、恒常的に活動が実施されている状態を作り出す必要がある。そのため、単発での実施ではなく、「放課後」に年間を通じて継続的に開講し、既存の公教育と地続き的に展開していく。

実施日を一日に限定するのではなく、数日間にもわたるプログラムとすることで、子どもたちが体験したことを定着化できるように配慮するとともに、講師やボランティアスタッフと接する時間が増えることで、交流が深まり、より豊かな人間関係を築くことが期待できる。

学期にあわせた開催

公教育の3学期と合わせ、以下の時期に開講する。

クール	春学期	秋学期	冬学期	年間 18回
開催月	4-5-6月	9-10-11月	12-1-2月	
開催回数	6回 1ヶ月に2回開講 (2週間に1回)	6回 1ヶ月に2回開講 (2週間に1回)	6回 1ヶ月に2回開講 (2週間に1回)	

さらに、上記学期に合わせた開講とは別に、夏休みの期間に集中的なワークショップを実施する。ワークショップに際しては、CANVAS (p.27) などの同種の活動を行っている団体との協働実施など通常とは異なる方法での運営を行うことも可能である。また、他の団体との間のコミュニケーションをとる機会ともなる。

講座のテーマ構成

1コマ：放課後の開講であることを考慮し、1コマ90分を想定する。

- ・ロングターム：6コマ
- ・ショートターム：3コマ
- ・単発：1コマ

	4月		5月		6月	
ロングターム	[Shaded area]					
ショートターム	[Shaded area]		[Shaded area]			
単発	◎	◎	◎	◎	◎	◎

ターム構成の例（春学期）

6. カリキュラム編成

講座形式、領域、講師、場所を組みあせて多様なプログラムを作成する。カリキュラム編成イメージについては、添付資料5も合わせて参照のこと。

ロングターム講座：アーティストとの綿密なプログラム考案に基づいて実施するプログラム。

リサーチをはじめとする準備に時間をかけて実施する。アーティストによる表現やアーティストの力が発揮され、地域に新たな価値観がもたらされる。また、アーティストが芝地区に集まる契機となり、アーティスト・イン・レジデンスへの発展の可能性がある。プログラム実施後の新たな作品設置の可能性など、文化的資源が生成され蓄積される。

ショートターム講座：在勤者にとって参加が容易なシステム／手ぶらで社会貢献

多忙な在勤者が気軽に参加し、技能や専門性を伝達できる。プロボノ活動の一環として位置付けて行う。多くの人に参加しやすいシステムとして確立することで、気負わずに参加することが可能になる。

条件：事業の枠組みを作りこむことが必要である。また、人の集まりやすさの点から、活動の拠点が求められる。

6-1. 講座形式

講座の内容、講師や子どものタイプに対応できるように、バリエーションのある講座形式を準備する。実施にあたっては、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、ディスカッション、体験、コミュニケーションを軸に展開していく。また、スキルを身につけた、講師を補助するティーチングアシスタントを配置し、効果的な学びの場となるように設計する。

- ・レクチャー
- ・ワークショップ
- ・展示
- ・オープンアトリエ⁵¹



オープンアトリエの例 (Children's Museum of the Arts, New York)

⁵¹ 制作に必要な道具が常備されており、利用者が好きな時に立ち寄り、制作できるスペース。写真は、Children's Museum of the Arts (ニューヨーク市) のオープンアトリエの様子。

6-2. 対象領域

港区は歴史的・文化的に豊かな資源を有し、さらに大使館や大手通信事業者の本社などの事業主体を擁するなど、人的資源も豊富である。こうした港区の多様性を活用し、一つの芸術領域に偏らない講座構成を提案する。

- ・造形芸術
- ・パフォーマンス・アーツ（上演芸術）（p. 8）
- ・サウンド・アート
- ・メディア、写真、映像
- ・デザイン
- ・歴史・地域
- ・その他

各領域に関わる個別テーマとして設定する他、各領域を横断する形でのテーマを設定することで、展開の可能性に開かれたプログラムを作成することができる。

例) 商店街のポスターデザイン作成 対象領域：歴史・地域×デザイン×造形芸術

- ステップ1：対象となる商店街についてのリサーチ
- ステップ2：地域の人へのインタビュー
- ステップ3：講師からデザインについて学ぶ
- ステップ4：ポスター制作
- ステップ5：発表、掲出
- ステップ6：交流会の開催 実施報告、地域の方からのフィードバック

6-3. 留意点

アウトプットの重要性

スクール事業は、参加している人だけが満足度や事業理解度が高く、その他の人は事業の理解がすすまない、他人事として捉えてしまう、という状態に陥ってしまう傾向がある。そのため、アウトプットの在り方に留意する必要がある。アウトプットがきちんと区民に認識される形で行われることによって、直接事業に参加しない区民にも、事業の効果を行き渡らせることができる。事業に関心を持った人がアクセス可能な環境をつくり出すといった土台整備に加えて、情報発信を継続的に行うなど、絶えず事業の意義を発信していくことで、事業が地域に根付き、そこから広がりやつながりが生まれてくるような在り方を検討すべきである。

**参加者による企画提案の仕組み：
サステナビリティ（持続可能性）⁵²の確保と主体性の醸成**

事業運営側のみが講座内容を企画立案するのではなく、事業対象者（生徒、講師）が自ら企画を提案することができる仕組みを作っていく。企画を考案するためのワークショップの実施などを行う。企画提案に多様な人たちが関わることで、広がりと継続性のある企画が生み出されると同時に、事業対象者の主体性の醸成が期待できる。

⁵² 現在から将来にわたって、持続することが可能であること。

7. 事業運営体制

本事業の運営にあたっては、以下の人的体制が想定される。

- ・総合ディレクター／キュレーター

事業全体を見通し、理念に照らして事業を推進する責任者

- ・プログラム・コーディネーター

各事業の専門的実務に取り組む職員。現代美術、美術教育、デザイン、アートマネジメントに関する専門的な知識を有する。英語をはじめとする外国語でのコミュニケーション力も求められる。プログラムの企画・立案、アーティストやアート・ディレクターとの交渉、印刷物や書籍の原稿・編集など。

- ・広報・交流プラットフォーム⁵³担当者

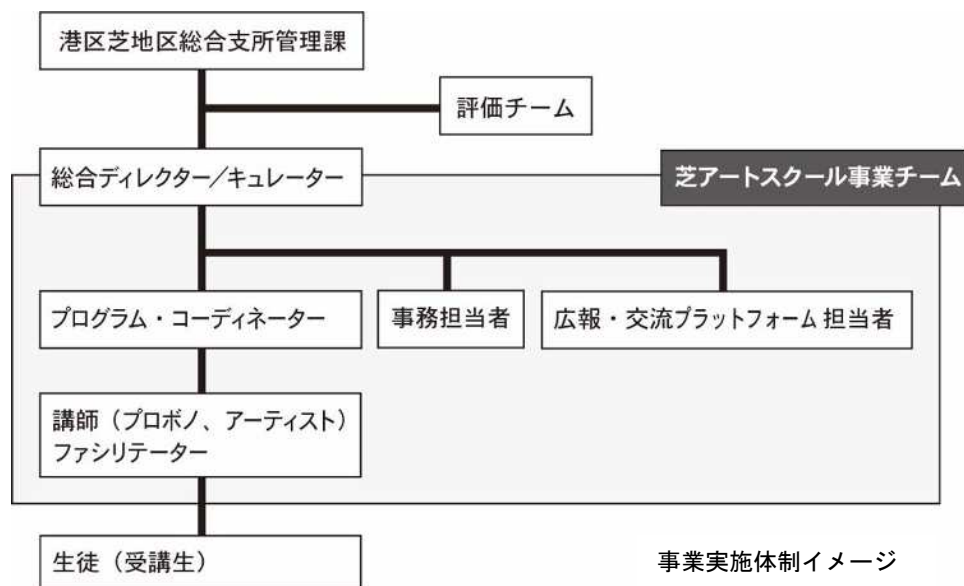
事業広報、ウェブサイトの運営、関連文化施設や企業とのネットワーク構築とその運営、外国語での情報発信

- ・事務担当者

事業の事務的な事柄を担当する。その他、ファシリテーター／プロボノの管理等

- ・プロボノ／ファシリテーター

在任、在学、在住者を中心に、本事業に関心のある方を公募し、研修を経て活動に従事する。



⁵³ 共通基盤や事業の共通の足場となる環境の意。プラットフォームを基軸として、交流やコミュニケーションが促進される。

人材配置案

基本配置：1クール1種6コマ×3クール

- ・総合ディレクター：1名
- ・プログラム・コーディネーター：1名（通年）
- ・広報：1名（週3日程度）
- ・事務担当：1名（通年）
- ・ファシリテーター：2名以上
- ・講師：1名

ただし、1クールあたりの講座種類が2種以上の場合は、上記に加えて、プログラム・コーディネーターを増員する。

例) 2種→プログラム・コーディネーター2名、3種→プログラム・コーディネーター3名

8. 事業実施設計（案）

本事業の安定的運営に向けて、パイロット事業、プロトタイプ事業、本事業の3段階（フェイズ）の段階的实施を提案する。フェイズごとの実施内容及びスケジュールの案については、添付資料6を参照のこと。

	パイロット事業	プロトタイプ事業	本事業
目的	<ul style="list-style-type: none"> 事業構想の具体化 試行的ワークショップ フィードバック収集 効果の検証と課題抽出 	<ul style="list-style-type: none"> 講座の年間実施 運営体制の整備 本事業運営組織の提案 フィードバック収集 効果の検証と課題抽出 次期3カ年計画策定 	<ul style="list-style-type: none"> 事業の安定的運営
イベント・講座実施	<ul style="list-style-type: none"> 学童保育を対象とした試行的ワークショップ:3回 成果報告イベント1回 	<ul style="list-style-type: none"> 通年(春・秋・冬学期)での講座開講:全18回 春学期は1回完結型講座、秋学期はショートターム型講座、冬学期はロングターム型講座とし、各形式のプロトタイプ構築を行う 成果報告イベント:1回 	<ul style="list-style-type: none"> 通年(春・秋・冬学期)での講座開講:全54回 各学期ごと、1回完結型、ショートターム、ロングタームの各形式の講座をすべて実施する 夏期集中ワークショップ:1回
運営体制整備		<ul style="list-style-type: none"> 事務局設置 通年開講を担保する組織構成の提案 	<ul style="list-style-type: none"> 事務局の安定的運営 プロボノ講師獲得のための仕組み形成
事業の評価	<ul style="list-style-type: none"> 効果の自己検証と課題抽出 	<ul style="list-style-type: none"> フィードバック収集 	<ul style="list-style-type: none"> 評価チームと評価指標の設定 評価チームによる事業の検証
次年度計画	<ul style="list-style-type: none"> 事業計画の再検討 	<ul style="list-style-type: none"> 次期3カ年計画の提案 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度計画の提案

→ 図の拡大版は添付資料6へ

8-1. 令和元年度 パイロット事業

パイロット事業の目的

- ・事業構想を具体化する
- ・学童保育参加者を対象に、試行的なワークショップを実施する
- ・区民からのフィードバックを収集、効果を検証し、課題を抽出する

事業内容

- ・区との協議に基づく企画提案

学童保育参加者を対象とした試行的ワークショップの企画を検討、提案する。1回90分のワークショップを3回開催することを基本とし、区と協議の上開催回数を決定する。年度テーマを設定し、造形芸術、歴史・地域、デザインなど、パイロット事業を実施する対象領域を決定する。

事業の成果を広く区民に伝えるための成果報告イベントの企画を検討、提案する。ワークショップ参加者（生徒、講師、区民）による座談会と、有識者による講演の組み合わせを基本構成とし、座談会の進行、講演のテーマ等について検討し提案する。

- ・関係者との調整・募集・広報

試行的ワークショップ：学童保育との交渉を行い、企画内容と実施日程を決定する。区との協議の上、パイロット事業の趣旨をよく理解する講師を選定、依頼する。

成果報告イベント：座談会モデレーター、有識者の選定と登壇交渉を行い、企画内容と実施日程を決定するとともに、ウェブサイト、チラシ、フリーペーパー等を用いたイベントの広報を行う。

- ・学童保育における試行的ワークショップの開催、運営

ワークショップ運営を円滑に行うために必要な人員（進行ディレクター、ファシリテーター等）を配置し、ワークショップの内容に沿った進行表を作成し、区と共有する。

- ・成果報告イベントの開催、運営

イベント運営を円滑に行うために必要な人員（進行ディレクター、司会者、ファシリテーター等）を配置し、講演会の内容に沿った進行台本を作成し、区と共有する。

- ・フィードバックの収集

試行的ワークショップ、成果報告イベントにおいて、アンケートやヒアリングなどを通じ、参加者からのフィードバックを収集する。フィードバック収集の方法については、区と協議の上決定する。

- ・課題の抽出と事業計画の再検討

参加者からのフィードバックを元に、事業効果の検討、課題抽出を行い、令和2年度に実施するパイロット事業について、事業計画の再検討を行う。

- ・報告書の作成

年間を通じて行った事業をまとめた報告書を作成する。報告書には、検討内容、調整結果、実施時期、場所、内容、参加者数、募集方法、参加者からのフィードバックに基づく考察等を明記する。

8-2. 令和2年度 プロトタイプ事業

プロトタイプ事業の目的

- ・講座の年間実施を通じて、本事業実施に向けたプロトタイプ構築を行う
- ・運営体制の整備を行う
- ・本事業運営組織を提案する
- ・区民からのフィードバックを収集、効果を検証し、課題を抽出する
- ・次期3カ年計画を策定する

事業内容

- ・評価チーム⁵⁴の組織と評価指標の設定

区との協議に基づき、社会的インパクト評価⁵⁵、HOPE 評価⁵⁶等の事業評価指標を設定する。

- ・区との協議に基づく企画検討

春学期（4～6月）、秋学期（9～11月）、冬学期（12～2月）の3学期制で講座を通年開講し、1ヶ月に2回、1学期計6回の講座を開催する。年間18回開講することを基本とし、春学期は1回完結型の講座、秋学期は3回を1セットとするショートタームの講座、冬学期は6回を1セットとするロングタームの講座を開講する。パイロット事業の実施結果を踏まえた上で、区と協議の上、年度事業計画を作成する。

事業計画の立案にあたっては、年度テーマを設定し、造形芸術、歴史・地域、デザインなど、パイロット事業を実施する対象領域を決定する。

加えて、事業の成果を広く区民に伝えるための成果報告イベントを企画する。講座参加者（生徒、講師、区民）による座談会と、有識者による講演の組み合わせを基本構成とし、座談会の進行、講演のテーマ等について区との協議の上、企画する。

- ・運営体制の構築

事務局を設置する。通年開講を担保する組織構成について検討し、区に提案する。

- ・関係者との調整

立案した事業計画に従い、事業実施に必要な場所、実施対象、講師等について検討を行い、関係者との調整を行う。

- ・広報・募集

ウェブサイト、チラシ、フリーペーパー等を通じた広報を行い、事業参加者を募集する。

⁵⁴ 本事業に対して客観的な評価を与えるチーム。複数の人員から成ることを想定しており、多角的な視点からの評価を行う。

⁵⁵ 社会的インパクト評価とは、社会的インパクトを定量的・定性的に把握し、当該事業や活動について価値判断を加えること。社会的インパクトとは、短期、長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的、環境的な「アウトカム(効果)」を指す。

参考資料：内閣府「社会的インパクト評価の推進に向けて－社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の基本的概念と今後の対応策について－（平成28年3月）」（報告書概要）添付資料7
<https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/social-impact-hyouka-gaiyou.pdf>

⁵⁶ HOPE 評価とは、2008年、ユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCU と略す）が開発・実践した評価手法。「共に考え、共に働く過程での困難や工夫、そして達成した成果を、『評価者－被評価者』の垣根を超え、学び合い、次に活かしていく」、「評価チームの存在を通して、主体的に自らの活動を振り返るきっかけに」し、「プロジェクトの対象者、現地コーディネーター、関係者、そして評価チームの人々にとって学びの機会」となる評価。

成田喜一郎（2011）「ESDの質保証とHOPE評価の可能性：子どもと教師のためのエスノグラフィー」『ひろがりつながるESD実践事例48』ACCU 冊子版 pp. 181-190. 座波圭美（2008）「持続可能な未来へ、希望（HOPE）をもたらす評価」ACCUNews 370.

http://www.accu.or.jp/jp/accunews/news370/370_06.pdf（参照：2019/08/06）

- ・事業の実施・運営

事業計画に従い、講座と成果報告イベントを実施、運営する

- ・フィードバックの収集

講座及び成果報告イベントにおいて、アンケートやヒアリングなどを通じ、参加者からのフィードバックを収集する。フィードバック収集の方法については、区と協議の上決定する。

- ・評価チームによる事業の検証

事業評価指標に基づき、評価チームによる事業の検証を行う。

- ・次期3カ年計画に関する区との協議と運営組織の提案

参加者からのフィードバック、評価チームによる事業の検証に基づき、事業の課題の抽出を行い、区と協議の上で次期3カ年計画を策定する。加えて、事業の安定的運営を可能とする運営組織に関する提案を行う。

- ・報告書の作成

年間を通じて行った事業をまとめた報告書を作成する。報告書には、検討内容、調整結果、実施時期、場所、内容、参加者数、募集方法、参加者からのフィードバックに基づく考察等を明記する。

8-3. 令和3年度 本事業

事業内容

- ・評価チームの組織と評価指標の設定

区との協議に基づき、社会的インパクト評価、HOPE 評価等の事業評価指標を設定する。

- ・区との協議に基づく企画検討

春学期（4～6月）、秋学期（9～11月）、冬学期（12～2月）の3学期制で講座を通年開講する。年間54回（2回／月×3ヶ月〔1学期〕×3種）の開講を基本とし、区と協議の上、1回完結型の講座、ショートタームの講座、ロングタームの講座を組み合わせた年度事業計画を作成する。

事業企画立案にあたっては、年度テーマを設定し、造形芸術、歴史・地域、デザインなど、パイロット事業を実施する対象領域を決定する。

加えて、7月末～8月に、夏期集中ワークショップを実施する。ワークショップの企画に際しては、同種の活動を行っている他団体との共同実施なども視野に入れた立案を行う。

- ・関係者との調整

立案した事業計画に従い、事業実施に必要な場所、実施対象、講師等について検討を行い、関係者との調整を行う。

- ・事業の安定的運営

事務局を設置し、事業の安定運営に向けた協議を区と行う。

- ・広報・募集

ウェブサイト、チラシ、フリーペーパー等を通じた広報を行い、事業参加者を募集する。

- ・事業の実施・運営

事業計画に従い、講座と夏期集中ワークショップを実施、運営する

- ・フィードバックの収集

アンケートやヒアリングなどを通じ、参加者からのフィードバックを収集する。フィードバック収集の方法については、区と協議の上決定する。

- ・評価チームによる事業の検証

事業評価指標に基づき、評価チームによる事業の検証を行う。

- ・プロボノ講師獲得のための仕組み形成

プロボノ講師の継続的な参加を担保するためのプロボノ講師ディレクトリを構築する。関心を持つ区民にディレクトリへの登録を促すイベントや、講師として活動するための基本的な技術を共有する講師向け講座を開講する等、プロボノ講師獲得のための仕組みの形成に着手する。

- ・報告書の作成

年間を通じて行った事業をまとめた報告書を作成する。報告書には、検討内容、調整結果、実施時期、場所、内容、参加者数、募集方法、参加者からのフィードバックに基づく考察等を明記する。

9. 主要参考文献（各領域内は刊行順）

美学・教育学

佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995年

佐藤学ほか訳『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、2001年

佐藤学、今井康雄『子どもたちの創造力を育む アート教育の思想と実践』東京大学出版会、2003年

『驚くべき学びの世界——レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS、2011年

ミヒャエル・パーモンティエ著、真壁宏幹訳『ミュージアム・エデュケーション 感性と知性を拓く想起空間』慶應義塾大学出版会、2012年

秋田喜代美編『岩波講座 教育変革への展望 学びとカリキュラム』岩波書店、2017年

山口周『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？ 経営における「アート」と「サイエンス」』（光文社新書）光文社、2017年

『発達』第156号、ミネルヴァ書房、2018年

カンチェーミ・ジュンコ、秋田喜代美編『GIFTS FROM THE CHILDREN 子どもたちからの贈りもの—レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践』萌文書林、2018年

社会／地域とアート

ICC編『アート・ミーツ・メディア：知覚の冒険』NTT出版株式会社、2005年

高階秀爾、建畠哲、水沢勉、蓑豊編『まちとミュージアムが織りなす文化』現代企画室、2013年

港まちづくり協議会『み（ん）なとまち VISION BOOK 2013-2018』2013年

アーツ前橋監修『ここに棲む 地域社会へのまなざし』彰国社、2015年

『アーツ前橋 地域アートプロジェクト 2011-2015 ドキュメント』アーツ前橋、2015年

港まちづくり協議会『港まちづくり協議会 2017年度報告書』2018年

『現代美術館は、新しい「学び」の場となり得るか？ エデュケーションからラーニングへ森美術館主催国際シンポジウム記録集』森美術館、2018年

九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』水曜社、2018年

文化庁 × 九州大学共同研究チーム編『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、2019年

多文化共生と子どもの教育

『ユネスコスクールは今 広がるつながる EDS 推進拠点』公益財団法人ユネスコアジア文化センター、2015 年

高橋一也『世界で大活躍できる 13 歳からの学び』主婦と生活社、2016 年

永田佳之「SDGs 時代の学習論——持続可能な社会と存在をはぐくむ幼児教育」『発達』150 号、ミネルヴァ書房、2019 年

子どもを対象とするワークショップ

株式会社電通「広告小学校」事務局『広告小学校 CM づくりで、「伝える」を学ぼう。』株式会社宣伝会議、2011 年

石戸奈々子『子どもの創造カスイッチ！ 遊びと学びのひみつ基地 CANVAS の実践』フィルムアート社、2014 年

参考 URL

Creative Scotland

<https://www.creativescotland.com/>

Minatomachi Art Table, Nagoya

<http://www.mat-nagoya.jp/>

CANVAS

<http://canvas.ws>

レッジョ・エミリア幼児教育活動

<https://www.reggiochildren.it>

1

横浜市芸術文化教育プラットフォーム 概要

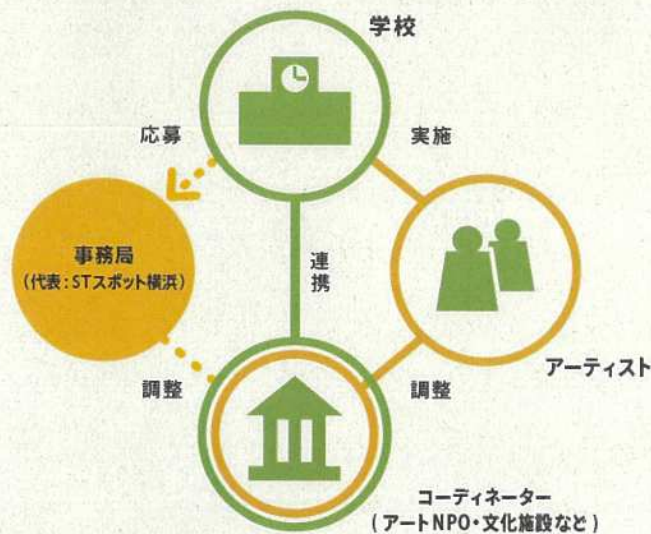
横浜市芸術文化教育プラットフォームは、芸術文化の学校向けプログラムを中心とした「連携のしくみ」です。さまざまな立場の方があつまって、つくられています。ねらいは、次の三点です。

- (1) 学校現場の実状に応じ、カリキュラム上での芸術文化活動の位置付けを行うための体制づくり
- (2) さまざまな実施主体、関係団体を結ぶネットワーク
- (3) 子どもたちにとって効果的なプログラムの提供及びプログラム実施に関する調査研究や人材育成

各学校は、カリキュラムに位置付けるなど学校現場の実状に応じた効果的なプログラムを考えます。

アートNPOや文化施設などは、コーディネーターとして学校の先生とアーティストをつなぎ、取組が円滑に進むよう調整し、子どもたちに向けたプログラムを実施します。

また事務局（STスポット横浜内に設置）は、横浜市芸術文化振興財団、横浜市文化観光局、横浜市教育委員会と連携し、年間を通して学校からの相談対応や、学校プログラムの募集業務等の調整を行います。



平成30年度のコーディネーター ※順不同。

【アートNPO、民間芸術文化団体】Media Global、よこはま音楽広場実行委員会、特定非営利活動法人 子どもに音楽を、特定非営利活動法人 横浜こどものひろば、特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち、ART LAB OVA、民族歌舞団 荒馬座、アートの時間、特定非営利活動法人 Offsite Dance Project、認定特定非営利活動法人 あっちこっち、特定非営利活動法人 横浜シテリオペラ

【地域の文化施設】青葉区民文化センター フィリアホール、泉区民文化センター テアトルフォンテ、栄区民文化センター リリス、神奈川区民文化センター かなつくホール、港南区民文化センター ひまわりの郷、鶴見区民文化センター サルビアホール、戸塚区民文化センター さくらプラザ、緑区民文化センター みどりアートパーク、旭区民文化センター サンハート、磯子区民文化センター 杉田劇場、大倉山記念館、急な坂スタジオ、久良岐能舞台、象の鼻テラス、長浜ホール、吉野町市民プラザ、岩間市民プラザ、横浜市市民会館 関内ホール、神奈川県立音楽堂、横浜市民ギャラリー、横浜市民ギャラリーあざみ野、横浜美術館、横浜にぎわい座、横浜赤レンガ倉庫1号館、横浜みなとみらいホール、横浜能楽堂

【事務局構成団体】公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 協働推進グループ、認定特定非営利活動法人 STスポット横浜

港まちづくり協議会とは

港まちづくり協議会のはじまり

2006年8月のポートピア名古屋の開設にともない、協定を施行する自治体（蒲郡市など）から「環境整備協力費」（ポートピア名古屋売上の1%）が、名古屋市に交付されることとなりました。これを原資としたまちづくり事業を「港まち活性化の方針」に基づいて推進する団体として誕生したのが、港まちづくり協議会です。

港まち活性化の方針と 港まちづくり協議会の取り組み

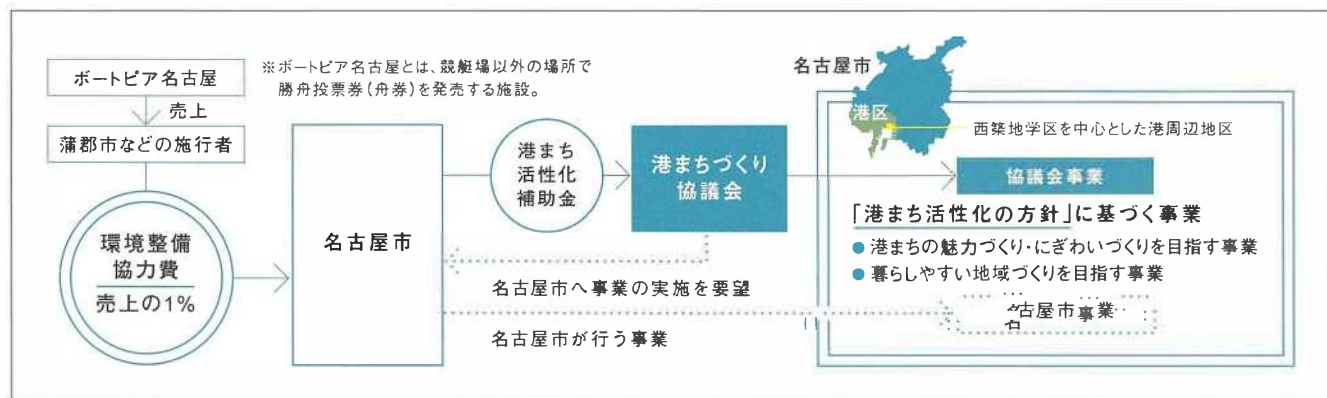
港まちづくり協議会の始動に先立ち名古屋市が策定し

たのが「港まち活性化の方針」です。

そこでは、「西築地学区を中心とした港周辺地区」において、「ポートピア名古屋の開設をきっかけに市民と行政との協働による港まちのにぎわいづくり・地域づくりを目指す」ため、「港まちの魅力づくり・にぎわいづくりを目指す事業」と「暮らしやすい地域づくりを目指す事業」の2つの事業を検討・実施することが明記されています。

港まちづくり協議会では、この方針に基づき、地域の意向を取りまとめて名古屋市に事業の実施を要望するとともに、港まち活性化補助金を活用し、各種の「協議会事業」を実施しています。これらの取り組みには、常に公共事業としての妥当性が求められています。

「環境整備協力費」を活用するまちづくり事業



2017年度 港まちづくり協議会メンバー

会長	高羽 章	西築地学区連絡協議会推せん
副会長	佐藤良一	築地口商店街振興組合推せん
	成田英樹	名古屋市港区役所区政部長
委員	大口靖夫	西築地学区連絡協議会推せん
	田島多津子	西築地学区連絡協議会推せん
	古谷 學	西築地学区連絡協議会推せん
	松本一男	西築地学区連絡協議会推せん
	牧ヶ野英生	西築地学区連絡協議会推せん
	酒井雄一	名古屋市総務局総合調整部総合調整室長

	前田行成	名古屋市市民経済局企画経理課長
	坂本敏彦	名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課長
	小島章徳	名古屋市緑政土木局港土木事務所長
事務局長	大野宏之	企画経理室長
事務局次長	古橋敬一	
事務局員	吉田有里	
	岡西康太	
	児玉美香	
	岡田和奈佳	

会計報告

2017年度の収入額は72,000,118円、支出額は53,881,845円で、本年度の収支差額は18,118,155円となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が3,554,415円、「△魅力的でにぎやかな港ま

ちに『集う』」が3,838,120円、「□みんなと港まちを『創る』」が19,103,620円です。事務局運営費27,385,690を含め、収支差額となる18,118,155円を、名古屋市へ返還しました。

(円)

項目	予算額	決算額
収入	72,000,000	72,000,118
支出	72,000,000	53,881,845
○暮らす LIVES	6,419,000	3,554,415
△集う MEETS	5,230,000	3,838,120
□創る CREATES	27,131,000	19,103,620
収支差額	0	18,118,155

港まちづくり協議会の活動参加者数

2015年10月に港まちポットラックビルがオープン。2016年からはアセンブリッジ・ナゴヤとも連携し、地域内外の多くの方々に知られるようになりました。レゴランドのオープンや大型商業施設などの建設も始まり、これ

から港まちに観光で訪れる方々も益々増えていくでしょう。引き続きポットラックビルを交流の拠点として、まちに訪れる方々がまちとつながる機会を創っていければと思います。

$$\bigcirc + \triangle + \square = \text{延べ} 12,914 \text{人}$$

表1・1 レッジョ・エミリアの幼児学校の時間割と教職員の編成

幼児学校の通常の構成	
クラス数	3
子どもの人数	75
教師の人数	6
アトリエリスタ	1
コック	1
補助スタッフ	4

子どもの通常の年間予定	
開始	9月1日
終了	6月30日

教職員の通常の年間予定	
初出勤日	8月23日
最終出勤日	7月5日

夏休み中のサービス
1校が7月中も開校

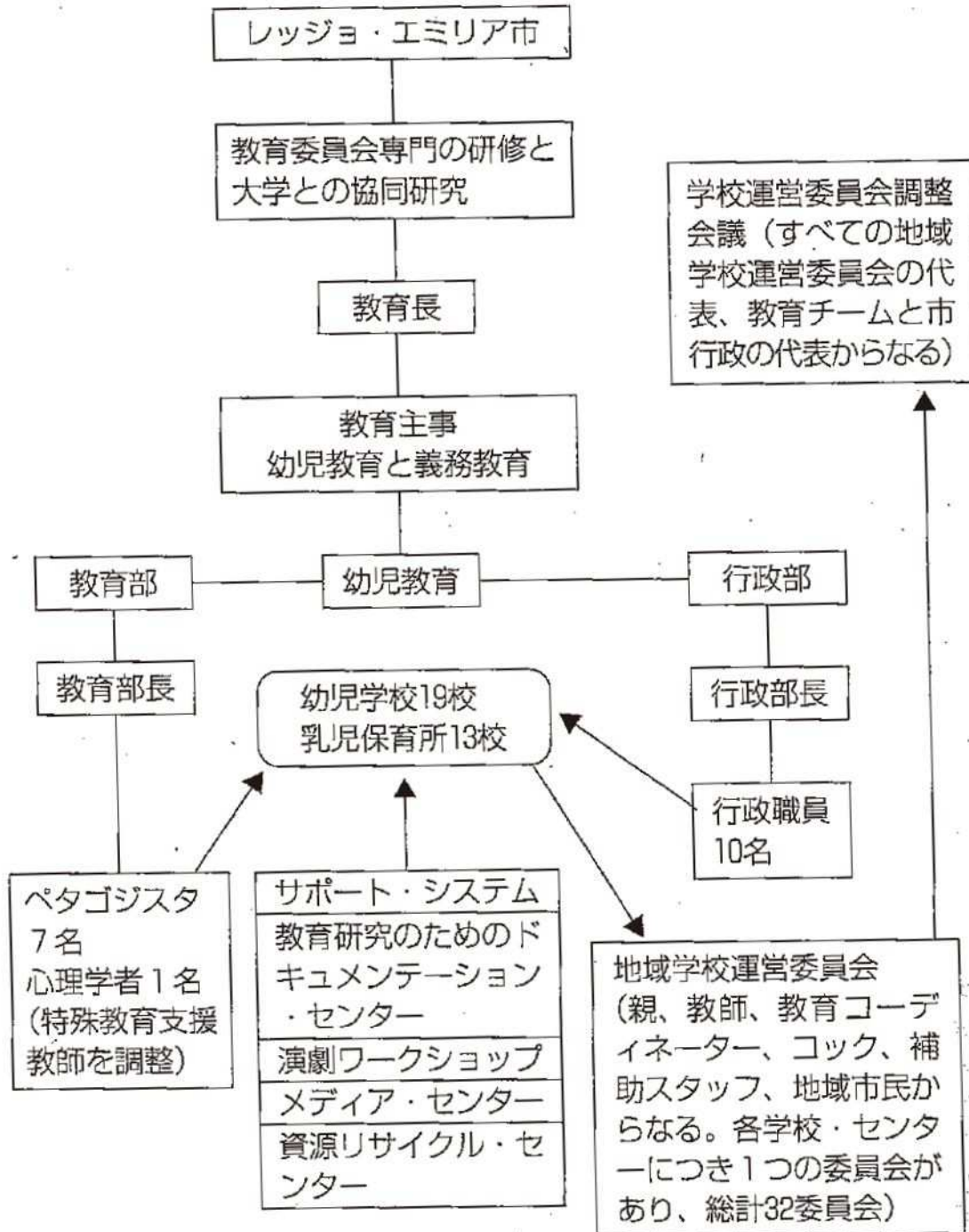
開校時間	
月曜～金曜	午前8時～午後4時
延長サービス	午前7時30分～8時 午後4時～6時20分

教職員の一日の予定	
第1シフトの教師	午前8時～午後1時48分
第2シフトの教師	午前8時27分～午後4時
アトリエリスタ	午前8時30分～午後3時33分
コック	午前7時45分～午後2時54分
第1補助スタッフ	午前8時30分～午後4時3分
第2補助スタッフ	午前9時から午後4時3分
その他	午後12時30分～午後6時54分

教職員の週例ミーティング	
週36時間のうち、	
子どもと過ごす時間	30時間
ミーティング、計画、	
現職教育	4.5時間
ドキュメンテーションと	
分析	1.5時間

出典：『歴史の概要、データ、情報』（レッジョ・エミリア市教育委員会、1996年）
21ページより。

表4・1 レッジョ・エミリア市行政における教育サービスのネットワーク



出典：『歴史の概要、データ、情報』（レッジョ・エミリア市教育委員会、1996年2月）34ページより。レーラ・ガンディーニの翻訳による。

港区立幼稚園 園児数・組数 (平成31年4月9日現在 ※3歳児は入園式(4月10日)現在)

幼稚園名	3歳児				4歳児				5歳児				合計			
	組数	園児数			組数	園児数			組数	園児数			組数	園児数		
		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計
赤羽	—	—	—	—	1	17	6	23	1	12	11	23	2	29	17	46
芝浦	1	23	12	35	2	27	18	45	2	14	19	33	5	64	49	113
高輪	1	16	11	27	2	14	21	35	1	15	11	26	4	45	43	88
白金台	2	15	17	32	2	28	19	47	2	27	15	42	6	70	51	121
三光	1	11	14	25	1	12	11	23	1	8	16	24	3	31	41	72
港南	3	38	33	71	3	31	36	67	2	31	23	54	8	100	92	192
麻布	2	24	21	45	1	12	10	22	1	8	14	22	4	44	45	89
南山	1	18	7	25	1	16	10	26	1	9	11	20	3	43	28	71
本村	—	—	—	—	1	10	14	24	1	5	6	11	2	15	20	35
中之町	2	27	22	49	2	25	19	44	2	19	18	37	6	71	59	130
青南	2	19	19	38	2	19	19	38	2	22	20	42	6	60	58	118
にじのはし	1	15	10	25	1	13	4	17	1	12	12	24	3	40	26	66
合計	16	206	166	372	19	224	187	411	17	182	176	358	52	612	529	1,141

港区立小学校 児童数・学級数 (平成31年4月8日現在 ※1年生は入学式(4月9日)現在)

学校名	1年				2年				3年				4年				5年				6年				合 計				
	学級	児童数			学級	児童数			学級	児童数			学級	児童数			学級	児童数			学級	児童数			学級	児童数			
		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計	男
御成門	2	41	32	73	2	19	38	57	2	30	30	60	2	31	29	60	2	29	21	50	2	29	26	55	12	179	176	355	
芝	2	39	32	71	2	31	28	59	2	30	36	66	2	25	33	58	2	42	30	72	2	31	36	67	12	198	195	393	
赤羽	3	50	47	97	3	35	36	71	2	40	34	74	3	52	38	90	2	22	29	51	2	27	23	50	15	226	207	433	
芝浦	7	109	109	218	7	113	118	231	5	91	102	193	5	102	94	196	5	107	73	180	5	89	77	166	34	611	573	1,184	
御田	3	30	41	71	2	43	28	71	3	39	43	82	2	29	29	58	2	28	32	60	2	35	27	62	14	204	200	404	
高輪台	4	67	69	136	3	47	55	102	3	57	57	114	3	46	51	97	3	48	39	87	3	57	47	104	19	322	318	640	
白金	4	71	56	127	4	61	48	109	3	54	43	97	3	54	48	102	3	55	41	96	3	52	40	92	20	347	276	623	
白金の丘学園 白金の丘	4	71	68	139	4	58	50	108	4	66	64	130	4	68	60	128	3	53	54	107	3	43	57	100	22	359	353	712	
港南	7	104	123	227	7	123	96	219	6	130	102	232	6	105	107	212	5	112	87	199	5	117	74	191	36	691	589	1,280	
麻布	2	32	28	60	2	35	25	60	1	17	15	32	2	26	18	44	2	25	23	48	1	22	20	42	10	157	129	286	
南山	2	45	11	56	2	25	21	46	2	29	17	46	1	17	12	29	1	16	11	27	1	12	16	28	9	144	88	232	
本村	2	34	35	69	2	34	28	62	2	35	29	64	2	25	18	43	2	37	10	47	2	37	28	65	12	202	148	350	
筈	3	44	41	85	3	40	32	72	3	56	33	89	2	36	31	67	2	32	43	75	3	54	29	83	16	262	209	471	
東町	3	42	39	81	2	36	32	68	2	40	37	77	3	46	54	100	2	45	31	76	2	39	31	70	14	248	224	472	
赤坂	3	39	48	87	3	54	43	97	2	42	26	68	2	37	31	68	2	36	37	73	2	32	29	61	14	240	214	454	
青山	1	14	12	26	2	37	17	54	2	20	21	41	2	25	18	43	1	21	18	39	2	27	18	45	10	144	104	248	
青南	3	57	48	105	3	54	50	104	3	55	45	100	3	51	30	81	3	39	44	83	3	56	36	92	18	312	253	565	
お台場学園 港陽	2	34	31	65	2	32	27	59	2	29	34	63	2	30	20	50	2	35	29	64	2	28	24	52	12	188	165	353	
合計	特別支援学級	8	2	10	11	3	14	8	5	13	9	5	14	13	3	16	5	5	10	12	54	23	77	6					
	通級																												
		57	923	870	1,793	55	877	772	1,649	49	860	768	1,628	49	805	721	1,526	44	782	652	1,434	45	787	638	1,425	299	5,034	4,421	9,455

※ 赤羽・港南・本村・青山小学校の上段の数は、特別支援学級児童数及び学級数(外数)

※ 麻布・筈小学校の合計欄上段の数は、通級の日本語学級数(外数)

※ 御成門小学校の合計欄上段の数は、通級の特別支援学級数(外数)

※ 合計欄の特別支援学級の児童数・学級数、通級学級の学級数は外数

港区立中学校 生徒数・学級数 (平成31年4月8日現在)

学校名	1年				2年				3年				合 計			
	学級	生徒数			学級	生徒数			学級	生徒数			学級	生徒数		
		男	女	計		男	女	計		男	女	計		男	女	計
御成門	3	43	53	96	3	44	46	90	3	47	34	81	9	134	133	267
三田	3	42	52	94	3	43	50	93	3	50	52	102	9	135	154	289
高松	3	50	49	99	3	58	40	98	3	45	44	89	9	153	133	286
港南		2	0	2		7	2	9		2	1	3	2	11	3	14
	4	67	54	121	3	40	43	83	3	44	37	81	10	151	134	285
白金の丘学園 白金の丘	2	35	22	57	2	26	15	41	2	37	35	72	6	98	72	170
六本木		1	0	1		0	3	3		1	1	2	2	2	4	6
	2	43	27	70	2	30	25	55	2	31	30	61	6	104	82	186
高陵	3	64	22	86	2	41	38	79	2	36	36	72	7	141	96	237
赤坂		5	0	5		2	1	3		4	0	4	2	11	1	12
	1	2	14	16	1	22	13	35	1	28	9	37	3	52	36	88
青山		2	0	2		3	0	3		3	1	4	2	8	1	9
	2	24	19	43	1	20	19	39	2	38	19	57	5	82	57	139
お台場学園 港陽	1	11	6	17	1	7	4	11	1	14	15	29	3	32	25	57
合計	特別支援学級	10	0	10	12	6	18	10	3	13	7	32	9	41		
	通級											2				
	24	381	318	699	21	331	293	624	22	370	311	681	67	1,082	922	2,004

※ 港南中学校・赤坂中学校・青山中学校の上段、六本木中学校の中段の数は、特別支援学級生徒数及び学級数(外数)

※ 六本木中学校の合計欄上段の数は、通級の日本語学級数(外数)

※ 合計欄の特別支援学級の生徒数・学級数、通級学級の学級数は外数

令和3年度

芝アートスクール

対象：小学校1年生から6年生／中学校1年生から中学校3年生

定員：各回15名程度／時間：いずれも16時-17時30分(90分)

今年のテーマ

創作体験、デザイン、地域の歴史、
地域の文化施設（博物館、美術館）
映像、建築、写真、演劇

春

4月	5月	6月
■	■	■
自由につくる・過ごす オープンアトリエ（単発参加できます！）		
■	■	■
デザインって何だろう？		誰もが使いやすいデザインって？
■	■	■
芝のまちをテーマにしたショートムービーをつくらう		

オープンアトリエ

気軽に訪れて、自由に過ごす、自由につくる。立ち寄り型の創作教室。絵画／工作／粘土／メディアアートに触れてみよう！制作はボランティアスタッフがサポートします。
講師：港区在住在勤のボランティア



デザインってなんだろう？

講師：アート・ディレクター、デザイナー
1コマ目：デザインってなんだろう？
2コマ目：お菓子の箱をデザインしてみよう
3コマ目：デザインしたものを発表しよう

だれもが使いやすいデザインって、なんだろう？

お年寄り、目の不自由な方、耳の不自由な方、いろいろな立場の人にとって、使いやすいデザインをいっしょに考えよう。
講師：アート・ディレクター、デザイナー
1コマ目：ユニバーサルデザインを知る
2コマ目：ユニバーサルデザインを見に行こう
3コマ目：誰もが使いやすい、こんなあったらいいな、と思うデザインを考えて、発表しよう



芝地区のお寺で座禅体験

講師：お寺のご住職
1コマ目：お寺のまち、芝地区を知ろう！
2コマ目：お寺で座禅体験
3コマ目：体験レポート お寺の魅力を伝えよう



探検！博物館&美術館

講師：港区ミュージアムネットワーク加盟館 学芸員
1コマ目：博物館、美術館ってどんなところ？
2コマ目：博物館、美術館へいってみよう！
（郷土歴史館、汐留ミュージアム、森美術館、国立新美術館など）
3コマ目：博物館、美術館で体験したことを伝えよう！



芝のまちをテーマにしたショートムービーをつくらう

講師：映像作家
1コマ目：ショートムービーとは？
2コマ目：芝のまちをリサーチ
3コマ目：芝のまちを歩いてみよう
4コマ目：撮影
5コマ目：編集
6コマ目：上映会



建築写真ワークショップ

いつも何気なく過ごしている校舎。好きな場所、落ち着く場所、思い出の場所。校舎を撮影して、タイトルをつけよう。
講師：建築写真家
1コマ目：校舎について調べる
2コマ目：校舎を撮影する
3コマ目：撮影した写真を選ぶ
4コマ目：写真にタイトルをつける
5コマ目：発表する
6コマ目：展示する



みんなでつくらう！小演劇

台本づくりから上演まで。大道具、小道具、メイク、役者、監督・・・それぞれの役割を決めて、みんなでひとつの劇をつくらう！
講師：劇団員
1コマ目：イントロダクション、自己紹介
2コマ：心とからだをほぐす
3コマ：台本づくり
4コマ：役決め
5コマ：リハーサル
6コマ：上演

秋

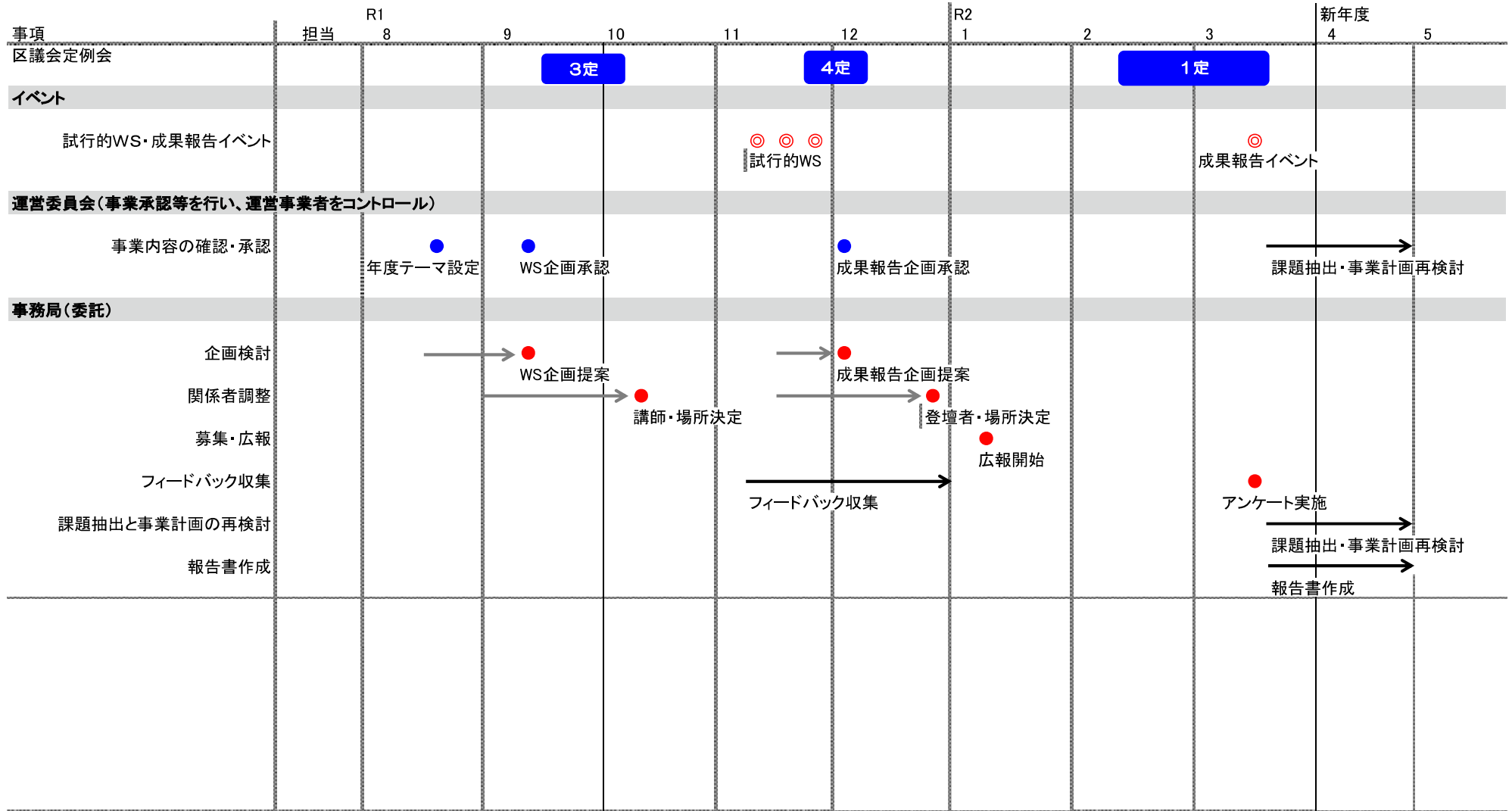
9月	10月	11月
■	■	■
自由につくる・過ごす オープンアトリエ（単発参加できます！）		
■	■	■
芝地区のお寺で座禅体験		探検！博物館&美術館
■	■	■
建築写真ワークショップ		

冬

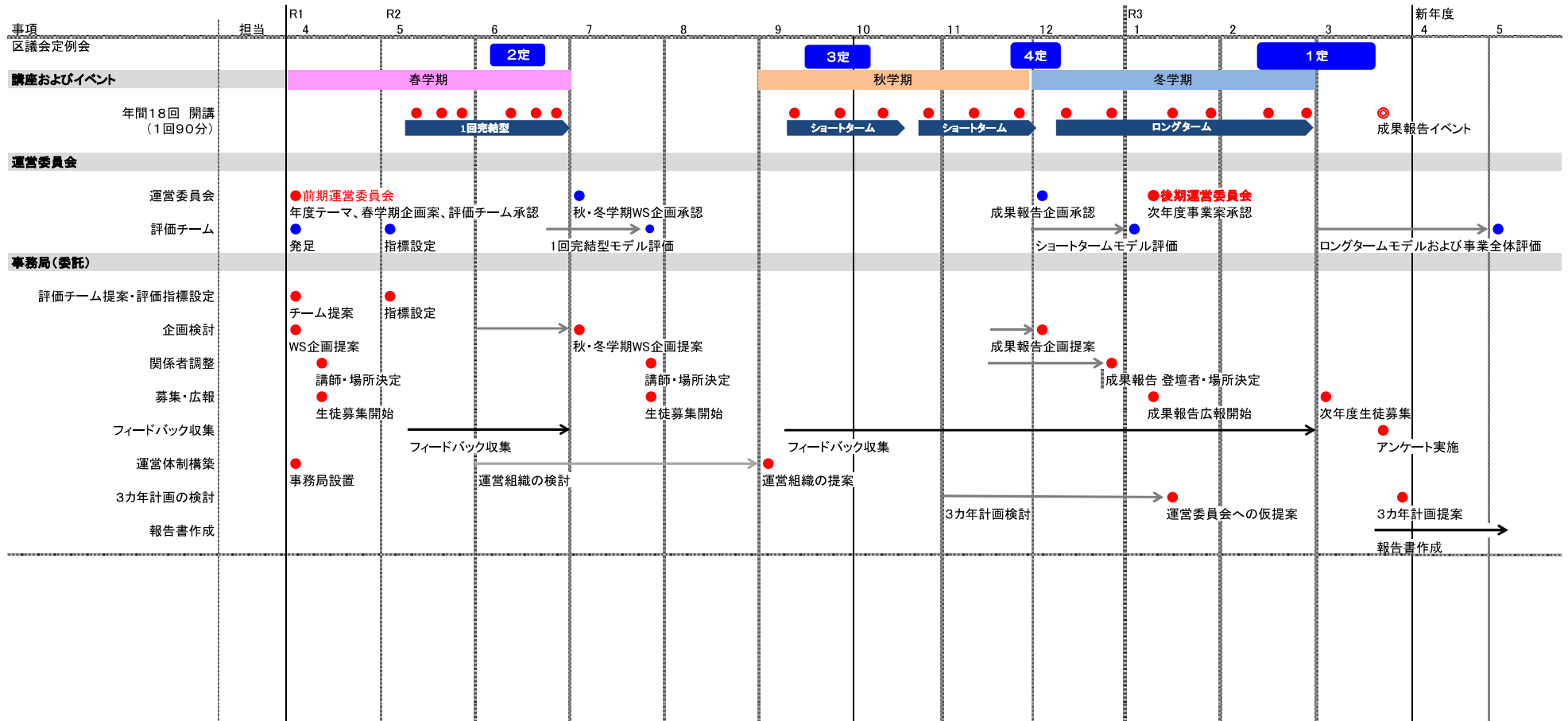
9月	10月	11月
■	■	■
自由につくる・過ごす オープンアトリエ（単発参加できます！）		
■	■	■
探検！博物館&美術館		探検！博物館&美術館
■	■	■
みんなでつくらう！小演劇		

	パイロット事業	プロトタイプ事業	本事業
目的	<ul style="list-style-type: none"> 事業構想の具体化 試行的ワークショップ フィードバック収集 効果の検証と課題抽出 	<ul style="list-style-type: none"> 講座の年間実施 運営体制の整備 本事業運営組織の提案 フィードバック収集 効果の検証と課題抽出 次期3カ年計画策定 	<ul style="list-style-type: none"> 事業の安定的運営
イベント・講座実施	<ul style="list-style-type: none"> 学童保育を対象とした試行的ワークショップ:3回 成果報告イベント1回 	<p>通年(春・秋・冬学期)での講座開講:全18回</p> <p>春学期は1回完結型講座、秋学期はショートターム型講座、冬学期はロングターム型講座とし、各形式のプロトタイプ構築を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> 成果報告イベント:1回 	<p>通年(春・秋・冬学期)での講座開講:全54回</p> <p>各学期ごと、1回完結型、ショートターム、ロングタームの各形式の講座をすべて実施する</p> <ul style="list-style-type: none"> 夏期集中ワークショップ:1回
運営体制整備		<p>事務局設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 通年開講を担保する組織構成の提案 	<p>事務局の安定的運営</p> <ul style="list-style-type: none"> プロボノ講師獲得のための仕組み形成
事業の評価	<p>効果の自己検証と課題抽出</p>	<p>フィードバック収集</p> <p>評価チームと評価指標の設定</p> <p>評価チームによる事業の検証</p>	
次年度計画	<ul style="list-style-type: none"> 事業計画の再検討 	<ul style="list-style-type: none"> 次期3カ年計画の提案 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度計画の提案

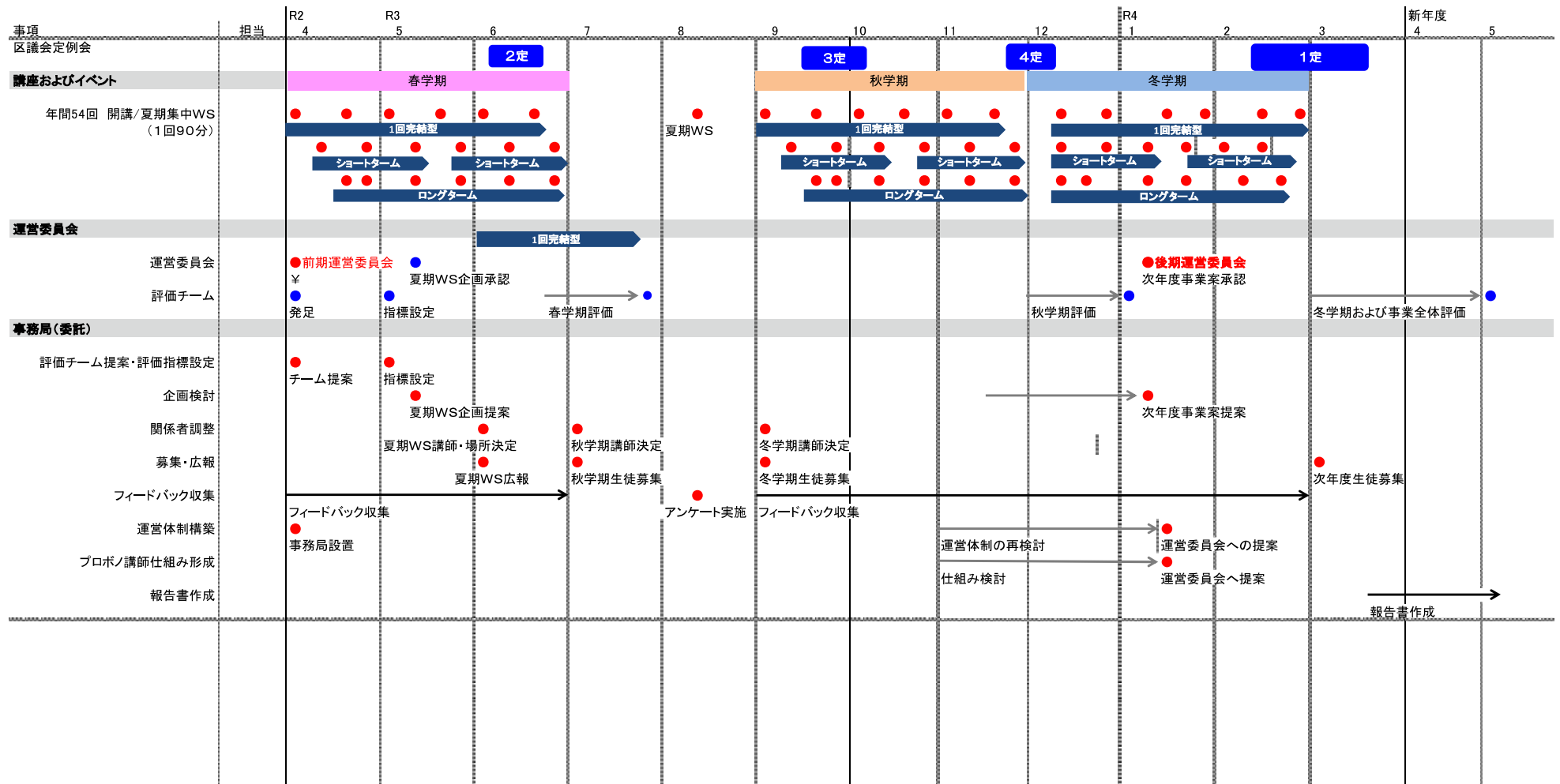
【令和元年度 芝アートスクール パイロット事業 実施スケジュール(案)】



【令和2年度 芝アートスクール プロトタイプ事業 実施スケジュール(案)】



【令和3年度 芝アートスクール 本事業 実施スケジュール(案)】



社会的インパクト評価の推進に向けて(概要)

～社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の基本的概念と今後の対応策について～

平成28年3月
社会的インパクト評価検討
ワーキング・グループ報告書

1. なぜ必要なのか

- (1) 国際的な潮流：資金の出し手の姿勢が変化（より成果を求める流れ）
- (2) 日本の現状：社会的課題が多様化・複雑化。意欲のあるあらゆる主体が知恵や技術を最大限発揮し、成長できる環境が必要
- (3) 社会的インパクト評価は社会的課題の解決力を高める礎
 - ・評価を通じ事業・活動の内容や方法を不断に見直し、組織運営の改善を図ることで組織が成長。
 - ・また、説明責任につなげていくことで資金、人材が公益活動に参画し、新たな手法を生み出すイノベーションをもたらす。

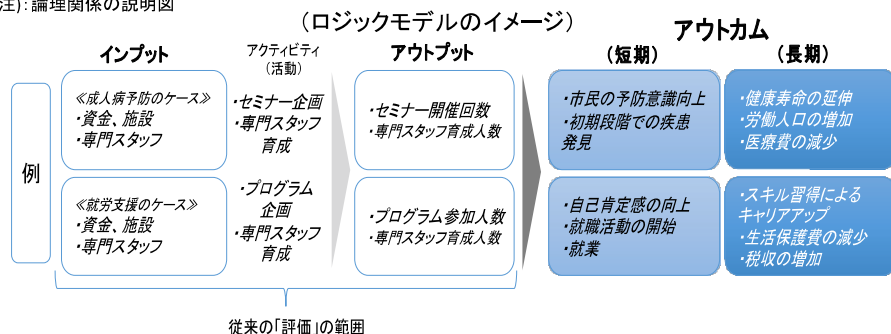
2. 社会的インパクト評価とは

社会的インパクト：短期、長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的、環境的な「アウトカム(効果)」
社会的インパクト外評価：社会的インパクトを定量的・定性的に把握し、当該事業や活動について価値判断を加えること

(社会的インパクト評価の特徴)

- ・アウトプット評価に止まらず、その先のアウトカムを評価
 - ・「ロジックモデル^(注)」を活用し「インプット」、「アウトプット」から「アウトカム」に至るまでの論理的な結びつきを明らかにする。
- ⇒事業計画の実効性や事業成果に関する**説明責任**へ（⇒更なる資源獲得）
⇒評価を通じた課題等の発見が、事業や組織運営の改善へ（**学び・改善**）

(注)：論理関係の説明図



(評価の意義・効果の例)

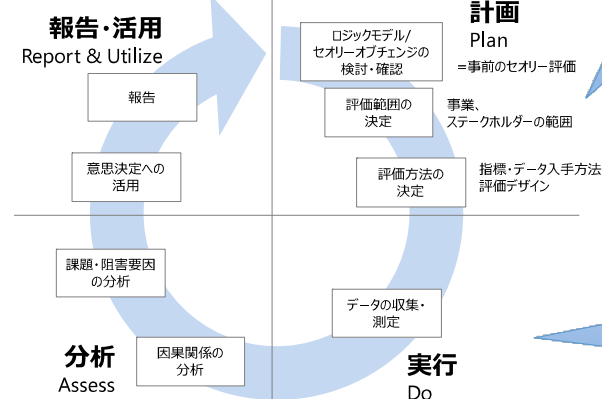
- ・事業者：人材・資金の獲得、事業改善・組織管理・運営の向上 等
- ・資金仲介者：資金の有効性の根拠、事業・活動の進捗・業績把握 等
- ・資金提供者：支援先の組織、事業・活動内容、実現可能性の判断材料 等

(評価の原則(例))

- ・重要性、比例性、比較可能性、利害関係者の参加・協働、透明性

3. どのように行うのか(評価の方法)

(評価過程(プロセス))



(分析手法の例)

	概要
事前・事後比較	事前・事後の指標値を比較
時系列	事業実施前と後のトレンドの変化を比較
クロスセクション	一時点で地域や個人間の事業実施状況とアウトカムの相関関係をみる
一般指標	全国平均値などの一般指標値と比較
マッチング	実施グループとそれに近いグループを選定し比較
実験的手法	無作為割付けにより実施グループと比較グループに分け、その差を比較

4. 普及に向けた課題と対応策

(課題)

- ①意義や必要性に対する「理解不足」、②手法に対する「理解不足」、③手段(ツール)の不足、④基礎的な情報の未整備、資料の不足、⑤評価人材の不足、⑥評価コストの負担と支援の在り方

(対応策：今後1年以内に着手すべき主な取組)

- ①評価普及のためのシンポジウム開催と「評価推進フォーラム」の立上げ
- ②「評価宣言」と「ロードマップ」の作成
- ③評価に関する用語の邦訳と定義の明確化
- ④「変化の理論」「ロジックモデル」等基本ツールの手引書(日本語)整備
- ⑤海外の先行文献のリスト化と主要文献の邦訳化
- ⑥評価の担い手の育成を目的とした講習会の実施とモデル事業
- ⑦評価事例(ベスト・プラクティス)蓄積とピア・レビュー実施による知識共有化